

第23回

さんりく・おおふなと

お話大賞作品集



大船渡市立中央公民館

はじめに

この「さんりく・おおふなとお話大賞」には、「童話創作で、ふるさとの未来に光を」をテーマに、ふるさと大船渡を舞台とした夢やユーモア溢れるお話が掲載されています。今年度は、小・中学生・一般の方からご応募いただき、このような素晴らしい作品集を発刊できましたことを嬉しく思います。

ご応募いただいた皆さんの作品には、ふるさと大船渡への想いが込められた作品が数多くみられました。また、今回の作品には、東日本大震災を題材にしたお話が多数ありました。これは、皆さんの心の中で、あの当時のできごとを整理しながら振り返ることができるようになった表われではないかと思います。この作品を読まれた方々は、皆さんの豊かな創作の力に感心し、改めてふるさと大船渡を大切に思う心が強くなるものと考えています。

長い人生の中で、そのときそのときの夢や希望を持ち、歩んでいくことはとても大切なことだと思います。これからも、たくさんの人や本と出会い豊かな感性や思いやりの心を育んで欲しいと思います。そして、さまざまな体験や感動をお話に生かして、またお話大賞にご応募してください。

結びに、この作品集の発刊にあたり、審査をされた先生方、ご指導、ご協力いただきました学校関係者や多くの皆様に厚くお礼申し上げます。

講 評

さんりく・おおふなどお話大賞審査委員長

熊 谷 勸

「さんりくお話大賞」から数えて今年度で二十三回目を迎え、「さんりく・おおふなどお話大賞」としては二回目でしたが、市内の小・中学生と一般から三十二点と昨年を上回る応募に、深く感謝を申し上げます。今年度の作品で特筆されることは、津波に関する内容が半分程度を占めたことです。その内容は、①津波当日の悲惨な事実②被災地復興への願い③犠牲者（ペットを含む）に対する追悼に分けられます。津波に対して否定的な文面は見られませんが、子どもから大人まで心の変化が伺われます。

さて、審査に当たりましては、①テーマが独創的で発想が豊かであるか。②初め・中・終わりなどの構成が工夫されているか。③読み手に分かりやすく目に浮かぶような書き方になっているか。④大船渡の郷土の理解や愛情が感じられる作品か。⑤総合的に見て素晴らしい作品であるか。の五つの観点で、四名の審査員が行いました。

その結果、いずれの作品も郷土への愛情や理解が感じられ、発想豊かで想像力や説得力があり、甲乙つけ

がたいレベルの高い作品ばかりで、審査員を悩ませることになりました。入賞されました九名の皆さん、大変おめでとうございます。その中でも、昨年度に引き続き小学生高学年から「大賞」が生まれ、中学生からは初めて「準大賞」が決定されたことをうれしく思います。

ただ、ここ数年、日本昔話（桃太郎や竜宮城、宝さがしなど）から構成を取り入れた表現が見られますので、今後は新鮮な角度での内容を期待しています。

☆大賞

◆越喜来小五年 坂本 美岬さん

『震災をのりこえたヤドカリたち』

環境破壊をしている人間の身勝手さを批判していたヤドカリが、復興活動に取り組む人間の姿を見習って生活していく作品です。ヤドカリの目線から、私達人間社会のありかたを問う説得力のある完成度の高い作品です。地震や津波、そして避難所での様子など、すべて震災時の人間の行動を重ね合わせ、震災の恐ろしさや悲惨な生活を描いています。そこから学んだことは、「声を掛け合い、楽しく真面目に仕事をする事。」です。そうすれば、「みんなの気持ちが一つになって、震災前よりいい町になります。」それが、美岬さんが

訴える見事な「主題」につながっています。また、「ヤド」や「ヤドカリナ」などの名前がユニークで、「ヤドカリ」の給料が塩、大さじ一杯分」など発想も豊かで、表現力も優れた大変素晴らしい作品です。

☆準大賞

◆大船渡市立第一中学校一年 横澤 真希さん

『夏の思い出』

「また来年もここで花火を見ような。」から「今日で行くのは最後にしよう。」と変わり、「これから、ここで花火を見ような。」と結んだ起承転結の構成が、秘密基地で遊んだ幼馴染を津波で失った悲しみの表現内容や方法も含めてかなり高度な作品です。また、最初の夢に出てきた幼馴染の紹介、次に津波で町が呑み込まれた夢。その二つの夢の中から幼馴染が津波の犠牲になった設定と、「もうここに来てくれないか」と思ったよ。大船渡の学校に戻ることにあったんだ。」という文章から、作品全体が「夏の思い出」というタイトルを醸し出している素晴らしい作品です。

☆小学生低学年の部〈奨励賞〉

◆越喜来小二年 神津 心さん

『もものとくべつな誕生日』

テーマに沿った構成や内容が大変素晴らしいです。また、「葉っぱのお皿に、甘い蜂蜜を使った蜂蜜マカロン」「空の雲を取ってきて、夕焼け色のファンタジー綿あめ」など、甘い香りがいっぱい表現もほんのりしていて楽しさが伝わってきます。さらには、妖精たちから貰った首輪の星のストラップと、マリが「楽しかったね。」と言っているように見えましたという最後の表現が、まさに〈特別な誕生日〉を生かしています。

◆越喜来小三年 田端 里帆さん

『こわい？月のわぐま』

お父さんから聞いた〈怖い月のわぐま〉とクーちゃんとの会話である〈優しい月のわぐま〉を比べて、具体的にテーマに迫っています。また、そこから、教訓として熊の怖さを教え、登校時や外出時には鈴をつけることを勧めています。「夏虫山」と「今出山」の比べ方も、工夫されています。「私の歌に合わせるように太い声が」と、「当然、熊に追いつかれて大けが」は、〈優しい月のわぐま〉と〈怖い月のわぐま〉を説

明する上手な表現方法です。

★小学生高学年の部〈奨励賞〉

◆越喜来小四年 大久保 真尋さん

『さくらと貝の葉』

母親の重い病気を治すため、仲間と協力することの大切さを訴えています。そして、海の仲間であるクジラの送り迎えやイカ墨、フグの針突き、アンコウの光など、具体的に個性の発揮にも触れています。これらは、娘が母親を助けたい一心での冒険であり、命がけの戦いでもあり、ほほえましい物語です。さらには、青くきれいで大きな海やカモメなど、たくさんのお魚と合わせて、郷土への愛情が感じられる作品です。

◆末崎小五年 尾崎 萌さん

『水仙の花が教えてくれたこと』

どんなことがあっても、夢をもつて力を合わせるのか。それとも、進んでやろうとする心か。いずれも、震災から学んだことです。そうれば、必ず最後には素晴らしい花が咲く。まさに、今求められている、震災からの復興を目指す現実問題と重なります。仮設住宅を訪問しながら、津波ですべてを奪われた人々の悩みを聞いて花を咲かせる行動は、小学生高学年女子とし

てほほえましい構成です。

◆猪川小六年 菊地 織江さん

『神風く神の力で何かが起こる!!』

方言で展開した文章表現と郷土色豊かなメニューは、郷土への理解と愛情を大いに感じます。そして、「光をあびたその正体」の書き方は、読み手にわかりやすく目に浮かぶような高度な表現力です。また、初めての「生ぬるーい風」から「月明かりに照らされてぶきみに輝くするどい刃」は、読み手が引き込まれそうなきき方です。さらには、大きな口で歯を「カチッ・カチッ」と鳴らして目や腰を治す二回の表現の仕方は、作品全体をしまったものになっています。

★中学生の部〈奨励賞〉

◆末崎中一年 武田 果穂さん

『小さな旅』

郷土である碓石海岸への一人旅が、自分を素直に大きくしてくれた作品です。しかもそれが、母親とケンカをして家を飛び出したことから始まっています。小学生の高学年から中学生にかけての思春期に、よくあ

ることです。漁師であるおじいさんとの対話の中から、さりげなく海から見上げた岩肌の素晴らしさも上手に表現しています。また、小さかった頃の自分が夢の中に現れ、母親の愛情を再確認したことが、書き出しの「穴通磯」の「丈夫に育つ（成長）」に結びついた構成も立派です。

☆一般の部へ奨励賞

◆渡邊 和恵さん

『海色の手紙』

震災を題材にした辛く切ない「嘘の手紙」、女性ながら思春期男子の心情をうまくとらえて表現しています。文章全体に倒置法がふんだんに使われ、味のある作品に仕上がっています。娘が津波で犠牲になって抜け殻みたいになった母親への愛情のため、二歳年上の兄が妹に成りすまして書いた手紙。女の子っぽい便箋や封筒探し、小学生高学年女子の好みや言葉遣いを知るための人知れぬ苦労。それが、いつの間にか本当の気持ちに変わっていく。まさに、主題の「海色の手紙」になっています。

目次

発刊の言葉

大船渡市教育委員会教育長

今野 洋二

講評

さんりく・おおふなとお話大賞審査委員長

熊谷 勵

大賞

震災をのりこえたヤドカリたち

越喜来小学校 五年 坂本 美岬…… 1

準大賞

夏の思い出

大船渡市立第一中学校 一年

横澤 真希…… 3

奨励賞

【小学生低学年部門】

もものとくべつなたん生日

越喜来小学校 二年 神津 心…… 6

こわい？月のわぐま

越喜来小学校 三年 田端 里帆…… 8

【小学生高学年部門】

さくらと貝の薬

越喜来小学校 四年 大久保 真尋…… 10

水仙の花が教えてくれたこと

末崎小学校 五年 尾崎 萌…… 14

神風く神の力で何かが起こる!？く

猪川小学校 六年 菊地 織江…… 18

【中学生部門】

小さな旅

末崎中学校 一年 武田 果穂…… 21

【一般部門】

海色の手紙

渡邊 和恵…… 24

☆ 作 品 集 ☆

《小学生低学年部門》

ふしぎないす

たのしかったね、森へ行った日

あいちゃんとどうぶつたち

どんぐり太ろう

《小学生高学年部門》

オオフナトン

ライたろとキンキンのぼうけんへゴー！

サニーとまほうのリボンの大船渡市をたずねて

ピコとぼくのつながり

未来に向かって

水中大冒険

ありがとう

奇跡の翼

私、大船渡が好き

末崎小学校 一年 おおわだひなの…… 31

吉浜小学校 二年 見せなな子…… 31

末崎小学校 二年 坂本 愛…… 32

赤崎小学校 三年 竹村 紗耶…… 34

盛小学校 四年 遠藤 文太…… 36

末崎小学校 四年 小松 真菜…… 37

盛小学校 五年 新沼 由唯…… 40

大船渡北小学校 五年 浦島 帆乃佳…… 44

大船渡北小学校 五年 栗村 翔笑…… 46

綾里小学校 五年 熊谷 ほの花…… 48

大船渡北小学校 五年 木下 愛友…… 52

越喜来小学校 六年 平田 涼介…… 54

末崎小学校 六年 佐々木 梓…… 57

笑顔へのかけ橋

世界一の友情

想　　い

大震災

大船渡のいいところ！

《中学生部門》

ウミネコと大船渡

忘れない

大船渡は観光の名所！

大船渡の未来

ふるさと

越喜来小学校 六年 大上 萌衣…… 61

末崎小学校 六年 大和田 真緒…… 62

猪川小学校 六年 渡 辺 響 …… 66

末崎小学校 六年 小川 楽人…… 67

末崎小学校 六年 臼 井 夕 菜…… 70

大船渡市立第一中学校 一年 大和田 彩 水…… 74

大船渡市立第一中学校 一年 互 野 紗矢香…… 77

大船渡市立第一中学校 一年 佐々木 勇 太…… 79

日頃市中学校 一年 新 沼 愛理沙…… 81

末崎中学校 三年 村 上 鈴 菜…… 83

大賞

震災をのりこえたヤドカリ達

越喜来小学校五年 坂 本 美 岬

暑い夏だ。浜辺の砂に、人間の子ども達が穴をほつて、海の水をためて遊んでいる。

「ああ、やめてくれ。」

ヤドカリは思った。そう、砂浜はヤドカリの仕事場なのだ。ヤドカリ達は、砂浜をそうじしている。一日、塩大さじ一杯分の給料だ。

なぜ、ヤドカリ達は砂浜で仕事しているかというと、今の時期はカメの出産の時期なのだ。カメが卵を産むための穴を掘りやすくするために、砂浜をやわらかくし、きれいな砂浜をつくっておくのだ。カメがきれいな砂浜で安心して卵を産めるように。

炎天下の中、ヤドカリ達は黙々と燃えるような熱い砂浜を平らにして、次は穴をほって、また平らにして…をくり返し、やわらかい砂浜をつくっていく。

そんなことも知らず、人間達はのん気に砂浜をかけ回ったり、穴をほって水をためて遊んだり…。せつか

くきれいにした砂浜をごみでよごしたりもする。本当にいいめいわくだ。あるヤドカリは、バーベキューをしていた連中が、あやまって火の粉をとばしたせいで、やけどをしてしまった。

夕方になり、人もだんだん減っていく、さつきまで人の声で満ちあふれていた海岸も、波の音しか聞こえなくなった。シャコガイが、今日一日の働き手に塩を渡していった。みんな黙って受け取っていく。

ヤドカリのヤドは、仕事が終わりに、貝にもぐりこんだ。夜になり、ふと目がさめた。のそのそ、何か引きずるような音がしている。ウミガメが、こちらにやってくる。ウミガメは、ヤド達がやわらかくした砂浜に穴をほって、卵を産み始めた。涙を流していた。ヤドは、無事赤ちゃんが生まれるといいなと思いながら見守った。

次の日の朝、またいつもの通り、砂浜のそうじが始まった。みんな一言も話さずに黙々とやっている。

砂浜の掃除をどれくらい続けたのだろう。いつしか季節は、冬の終わりに近づいていた。外にみると、寒くてかぜをひいてしまいうさだ。「ヘックション」「ハックション」。あちらこちらの貝から、くしゃみの音がする。時こくは、二時半すぎか。

とつぜん、かもめの大群がはげしく鳴き始め、山の

方に飛んで行った。なんだか様子がおかしいと思って、ヤドカリ達は仕事をやめ、カラから顔を出して空を見上げた。ゴゴゴ：と地鳴りが響き、不気味な感じがした。そのうち今度は、地面がはげしくゆれ始めた。

「ワー！」「怖いよ！」「

ヤドも叫ばずにはいられなかった。さらに、海もさわぎだした。グゴゴゴゴ・と、波はヤドカリ達をのみ込み、町までおしよせた。町のあちこちから放送や人間の悲鳴が聞こえてきた。ヤドは流されていって、波にのまれた障害物や電柱につぶされそうになった。きようふでいっぱいだった。

ヤドが、必死で電柱につかまったとき、運良く波が引き始めた。残っていたヤドカリ達も電柱に登ってきた。大人のヤドカリが

「ここはあぶない。もっと高い場所に行かねば。」

と、言ったので、ヤドカリたちは、ありったけの力をふりしぼって、急な坂も山も上っていった。そこから見た町は、一面が黒い海になっていた。

それからどれほどたったのか、ヤドはずっと眠っていた。ヤド達は、高台の空き地にいるようだ。周りには、テントやブルーシートを張って、人が避難している。テントはヤドカリの貝のようだ。

「人も怖いことがあると、何かに入りたくなるんだ。

ヤドカリみたいだな。」

そんな生活をしていると、ヤドカリリーナが、体調不良をおこしてしまった。食べる物もないからだ。他のヤドカリ達も腹が減って死にそうになっていた。周りの人間たちには、おにぎりとスープが渡されていた。

「ありがとう。」「助かるよ。」

と、人間達は声をかけ合っていた。

それを見たヤドは、おちているほんの少しのご飯つぶを拾い始めた。他のヤドカリ達もまねをして拾い始めた。空き地にいたアリ達も、拾ったお菓子のかけらを分けてくれた。

みんなで集めた食料は、結構な量になった。ヤドカリリーナに分け、そして、みんなでも分け合った。ヤドカリリーナの「ありがとう。」の声に、なんだか、みんなが励まされたような気がした。

町の一か所に、がれきが積み上げられるようになったころ、ヤドカリ達は、砂浜に戻ることにした。

砂浜は、木のクズとゴミが散乱し、ひどいにおいで、大変なことになっていた。そこへ、人間たちがやってきた。人間はしんぼう強くゴミを拾い、木クズを処理し、あんなにひどかった砂浜を、きれいにしてしまった。ヤドは、初めて人間達に感謝した。人も傷ついているのに、積極的に町のために働いているからだ。と

もに声をかけ合い、励まし合い、いたわり合って。「おつかれ様。」「大丈夫か。」「ご苦労さん。」などと。ヤド達も見習おうと思った。

大切なのは、ただひたすらに仕事に打ち込むだけでなく、声をかけ合い、楽しく真面目に仕事をすることなのだ。

それからヤドカリ達は、

「おーい、大丈夫か。」「うん、大丈夫。」「

「ここをそうじしてくれ。」「分かった。」「

というように、声をかけ合うようになった。会話が增えた。仕事もはかどる。しかも楽しい。

みんなの気持ちが一つになったから、震災前よりいい町になった気がする。

静かにウミネコが海の上を飛んでいた。

準大賞

夏の思い出

大船渡市立第一中学校一年 横 澤 真 希

ドッカーン

花火の音が町にひびく。

僕らは、だれもしらない僕らだけの秘密基地に居た。

そこは、花火がすぐきれいに見える場所だった。

「翔、また来年もここで花火を見ような。」

「おう。」

ドッン、ドーン、ドッーン

花火の音が大きくなるにつれて、なにかで頭をたたかれていたような……。

「…う、…よう、…よう。おい、起きろ翔!!」

バン!!

起き上がると、目の前には吉岡先生がいた。ということは、今の時間は数学だ。でも、僕の机の上には、英語の教科書がちらばっていた。

「お前寝てる余裕があったら、この問題を解いてみる!!」

教室には、笑い声がひびいた。

黒板には文字式がぎっしりかかれてあった。昨日予習したはずの問題だった。でも、寝ぼけているせいで、全く分からなかった。

「…：分かりますん…：。」

キンコーンカーンコーン

「よし、じゃあ、今日の授業はこれで終了。翔、ちゃんと復習しとけよ。」

はあ、助かった。

僕はカレンダーに目をやり、時間も確かめた。日めくりカレンダーには、二十十一年三月十一日と太字でかかれてあった。時刻は、午後二時ちょうどだった。帰りの準備をしながら、授業中に見ていた夢を思い出す。どこかで見覚えのある顔、そしてあの場所は……。

「あつ!!」

僕は思わず声を出してしまった。僕の声にみんなはいつせいに視線をこちらに向ける。

「あつ、ごめん。なんでもない。」

翔の言葉を聞くと、みんなは帰りの準備を続けた。夢の中に出てきた男の子は、雅紀だった。

雅紀は、僕の幼なじみで、幼稚園の頃から一緒にいた。家も近所だったので、よく遊んでいた。僕と雅紀は大船渡で生まれ育ち、大船渡の夏祭りが大好きだった。秘密基地をつくってから、花火はその場所で見ることがようになった。秘密基地から見る花火は絶景だった。でも、雅紀はもう僕のとおりにはいない。

去年、陸前高田市の学校に転校した。雅紀の家は、高田松原に近いところにあった。

学校は違うけど、時間がある日は遊びにいていた。そして、今年の夏も、あの秘密基地で花火をみるはずだった。

ガタガタガタ

急に教室が揺れだす。僕のとりの席のみくは、机の下で今にも泣きそうな顔で床を見つめていた。僕の上にある蛍光灯が落ちてきそうでこわかった。

「みなさん、揺れが激しくなったので、机の下にかくれてください!!」

揺れているせいで、いろいろなものがガタガタいって、先生の声がよく聞きとれなかった。でも、まわりの様子をみて僕も机の下にかくれた。その後も、長い揺れが続いた。

揺れがおさまると、先生は教室の入り口に立ち、手を挙げながらしゃべりはじめた。

「揺れがおさまりましたが、津波のおそれがあるので、高台にひなんします。」

そういって、みんなを並ばせ、早歩きで学校をでた。すると、町中にサイレンがひびき、高台にひなんしてくださいというアナウンスが流れる。

僕たちは、学校の上の方にある神社に着いた。神社は、ひなんしてきた人でいっぱいだった。でも、声がかかるほど泣きさけぶ人や、手を口にあててかたまっている人などがいた。みんな見ている方向が同じだった。僕はみんなが見ている方向に目をやると、その光景は今まで見たことのないものだった。海の方から、

黒い波が押し寄せてくる。僕が生まれ育った大船渡を……。小さいころから見てきた町が、黒い波にのまれていく。急に、雅紀の顔が頭をよぎる。僕の目の前は、真っ暗になった。

「……う、……よう、しよう。ごはんだよ。」

目を開けると、お母さんが僕の顔をのぞきこんでいた。今にも泣きそうな顔だった。となりを見ると、妹のさくらが涙を流して寝ていた。周りを見わたすと、ここは学校の体育館で、歩く道がないくらい人がいた。こんな人があるのに、友達は数人しかいなかった。「翔、もう大丈夫？おにぎりしかないけど食べられる？」お母さんはラップで包まれたおにぎりを差し出しながら言った。僕はお母さんの「もう大丈夫？」という言葉が気になった。

「僕は、どうしてここにいるの？」

すると、お母さんは泣きながら、

「翔、津波を見たの覚えてないの？あの黒い波が、家をこわしていったの。ここに人たちは、みんな家がなくなっちゃったんだよ。」

僕は神社で見た黒い波を思い出した。でも、僕はあの波を現実のものだと信じる事ができなかった。雅紀は、あの波をどう見たのだろう。

「お母さん、雅紀は、大丈夫だよ。今年も一緒に花火見られるよね。」

お母さんは、携帯を取り出し、なにかを探していた。

そして、僕に携帯を差し出した。画面には、「雅紀ママ」とかかれてあった。僕は、携帯を受け取り、耳にあてた。

プープープー

電波が届かないのか、つながらなかった。

そして、雅紀と連絡が取れないまま三年がたった。僕は、無事に小学校を卒業し、中学校に入学した。今日は、二十三年八月二日。中学生になって、五月がたった。だいたい学校生活にも慣れ、新しい友達もたくさんできた。

そして、今日八月二日は、夏祭りの日だった。毎年雅紀と行っていた夏祭り。花火を見る場所はいつも決まって、秘密基地だった。僕は、今日の夜で秘密基地に行くのは最後にしようと決めていた。

夜。僕は祭り会場に行く前に、秘密基地に行った。秘密基地は、昔のままだった。木を組み立てて作った小さな家で花火を見ていた。途中で雨が降ったときは、ずぶぬれになって家に帰ったことがあった。そのときは、二人でしかられた。

「なつかしいなあ。」

ゆつくりと小さな家に進むと、そこには、一人の男の子がいすに座っていた。その男の子の後ろ姿が雅紀に似ていた。僕は思わずさけんでしまった。

「まさき!!」

男の子は振り返ると、

「あつ、翔!! もう、ここに来てくれないかと思ったよ。」

久しぶりに会ってさっそくだけど、僕、大船渡の学校に戻ることになったんだ。」

雅紀は、いつもの笑顔で言った。前と雰囲気が少し違うけど、あいかわらず、空気を読めないという性格は変わっていないかった。

ドッカーン

そのとき、大きな花火があがった。ここで二人で見るのは本当に久しぶりだった。雅紀に会えなかった三年間。思い出すと、涙がでてきそうだった。でも、こらえきれず涙がでてきてしまった。

「どうした？」

雅紀が心配そうな顔でのぞきこんできた。涙を流した理由がうまくいえなかった。でも、これだけは言えた。

「これからも、ここで花火を見ような。」

奨励賞

【小学生低学年部門】

もものとくべつなたん生日

越喜来小学校二年 神 津 心

八月三日は、もものおたん生日。もものは、おきらい小学校の二年生です。もものは、じぶんのおたん生日を、とつてもたのしみにしていたのに、たん生日パーティーができなくなっていました。お父さんとお母さんが、しごとでいないからです。

もものは、がっかりして外に出ました。空はくもっていて、ますますかなしい気もちになりました。犬のマリがそつとちかよつてきて、足をぺろぺろなめました。

マリといっしょに、家のちかくのうらはま川まで来てみると、草の中に、にじ色にひかるものを見つけました。そばによつて見てみると、キラキラひかるにじ色キャンディーでした。すぐくあまいいいにおいがするので、ひろつてにおいをかいでみました。ほんのすこしなめてみたら、なんだかふしぎなあじがして、からだがむずむずしてきました。

そうしたら、きゆうにまぶしいひかりがひろがって、おもわず目をつぶりました。なんだろうとそっと目をあけると、まわりには、大きな石がたくさんあります。目の前には、ふわふわした大きいものがあります。それが、とつぜんうごいたので、びっくりしてよく見てみると、なんとマリのしっぽでした。もののからだは、すっかり小さくなってしまっていたのです。

すると、「あそこにどうくつがあるよ。」と聞いたことのあるような声が聞こえました。犬のマリの声でした。からだが小さくなったからなのか、マリと話ができるようになっていました。マリのせ中にのっていくと、そこには本とうに小さな小さなどうくつがありました。

中からにぎやかな声が聞こえてきたので、ももは入ってみることにしました。マリは、「ぼくは入れないから、ここであまっているよ。」と言いました。中には、草がいっぱいはえていて、おくがよく見えませんでした。声のするところにたどりつくと、そこには、たくさんさんのようせいたちがいました。

せ中に、きらきらひかる七色のはねをつけ、あたまには、お花のカチューシャをつけています。ようせいたちは、まるでちようちよのおにんぎようみたいでした。

ひとりの女の子のようせいに、なにをしているのかと聞くと、

「パーティーのじゅんびをしているのよ。」

と言いました。ももは、とつてもたのしそうなので、手つだうことにしました。お花のテーブルをはこんだり、きのこのいすをならべたり、はっぱのおさらにあまいはちみつをつかったはちみつマカロンをのせたり、大いそがしです。外からかえってきたようせいが、空のくもとつてきて、おさとうとはちみつをつかった、夕やけ色のファンタジーわたあめをつくってくれました。それは、あまくて口に入れるとすぐにとけてしまいました。

パーティーのじゅんびができると、さっきの女の子のようせいに、

「ちよっと、おくのへやであまっているね。」

と言われました。そのへやに行くと、そこには、いつのまにか小さくなったマリが、まっぴいてくれました。マリと、たのしくおしゃべりをしたり、うたをうたったりしていました。しばらくして、ようせいたちがよびにきました。マリといっしょにさっきのへやに行くと、「ももちゃん、おたん生日おめでとう」とたくさんのようせいたちに言われてびっくりしました。マリもいっしょにいいわいしてくれました。

なんとようせいたちは、お父さんやお母さんがいないかわりに、もものためのたん生日パーティーをひらいてくれたのです。大きないちごのケーキとはちみつのジュースでかんぱいをして、ものすごくてのしい一日になりました。そして、たん生日プレゼントに、ガラスのかけらをあつめてつくったストラップをもらいました。それは、とうめいなガラスの中にほしのすなが入っていて、とてもきれいでした。その日は、ようせいたちの家にとめてもらうことにしました。

つぎの日の朝、目をさますと、じぶんのベットにねていることに気づきました。もものからだも、もとにもどっています。ゆめだったのかなと思って外に出ると、マリの首わに、ようせいたちからもらったほしのストラップがついていて、キラキラとかがやいていました。マリが「たのしかったね。」と言っているようにみえました。

こわい？月のわぐま

越喜来小学校三年 田 端 里 帆

わたしの名前は、里帆。おき来に住む小学三年生。おき来には、動物がいっぱい住んでいるの。

しっぽの大きいきつね。いたずら者のハクビシン。しか。さる。りす。たぬき。てん…。

今日はその中のくまの話をしますよ。

くまと言えば、ひぐまが一番こわいそうです。でも、この辺にるのは、月のわぐまです。わたしはまだ会ったことがないけれど、お父さんにこんな話を聞きました。

むかしむかしおき来に、じいさんとばあさんとまご二人がくらしていました。ある日、みんなでしばらくに行くことになりました。まご二人は夏虫山に行かせ、じいさんとばあさんは今出山に行くことにしました。

じいさんは、まご二人にこう言いました。

「しばらくが終わったら、むかえに行くからまってろよ。」

じいさんとばあさんがしばらくをしていると、大きな大きな月のわぐまに会いました。じいさんとばあさんは、こわくてこわくて全力で走ってにげました。でも、当然くまに追いつかれて、大けがをしてしまいました。そのいたみはがまんできるものではなく、そこで死んでしまいました。

まごたちはじいさんたちがむかえに来ないから、帰れなくなってしまうました。そのまま夏虫山でまいご

になっちゃったそうです。

月のわぐまは、こわいですね。

ある日、わたしは、さんぽをしていました。いつものようにスキップしながら、鼻歌を歌いながら。すると、わたしの歌に合わせるように太い声が聞こえてきました。びっくりしてふり向くと、大きな月のわぐまが立っていたのです。こわくてこわくて、にげようとしたけれど、足がすくんで動けません。そのうち、くまが近づいてきました。

「いい歌ですね。すぐおぼえちゃいました。なんという曲ですか。」

わたしは、声も出ませんでした。すると、またくまが一步近づいてきます。

「どうしたんですか。具合でも悪いのですか。大じょうぶですか。」

わたしはやつとのことと、うなずきました。

「ぼくは、くまのくーちゃんです。よろしくね。」

「わたしは里帆です。」

くまのくーちゃん目がやさしかったので、わたしはやつと声が出せました。

「ごめんなさい。くまはこわいつて聞いていたから…。」

「うん、うん。里帆ちゃんも、昔話を聞いたんでしょ。」

でもね、本当はね。」

そう言ってくーちゃんがしてくれたお話は…。

くまはね、みんなれいぎ正しいんだ。ぼくのおじいちゃんのおじいちゃんもね、「あつあそこにしばかりをしている人がいるから、自こしようかいをしよう。」と思って二人のところへ行っただ。そうしたら、二人はびっくりして走ってにげていっちゃった。

「おーい。その二人、待ってくれー。わしの自こしようかいを聞いてくれー。まってー。」

と言って追いかけた。そしたら、またにげていっちゃった。そのうち二人が、木の根っこにつまづいてころんじやつたんだよ。おじいちゃんは何日もかんびょうをしたんだよ。でも、二人がよくなることはなかったんだよ。

おじいちゃんとおばあちゃんは、孫のことを心配していたから、ほかのくまにたのんで、道を教えてあげたんだよ。二人をおうちの近くまで送ってあげたんだよ。二人は、「ありがとう。」って、くまにお礼をしたそうだよ。でも、それから、二人は山に入ってきましたんでした。

「へえ。」

奨励賞

【小学生高学年部門】

さくらと貝の薬

越喜来小学校四年 大久保 真 尋

お父さんから聞いた話とは、ずいぶんちがいます。くまっ、本当はこわくないのかな。
「でもね、里帆ちゃん。」
くーちゃんが言いました。
「お話をできるくまは、今ではとっても少ないんだ。この辺では、ぼくだけだよ。ほかのくまは、人間がこわいから、手足をふり回して、けがさせちゃうこともあるから、あまり近づかない方がいいよ。」

それから、時々、くーちゃんとお話したりさんぽに行ったりするようになりました。でも、お父さんにはないんですよ。それから、やつぱりほかの月のわぐまもこわいから、学校へ行くときや遊びに行くときは、大きいすずを持って行くようにしています。

みんなもおうちの人やいろいろな動物から昔の話をきいてみるといいよ。勉強になることがたくさんあるからね。

これは、わたしのおじいちゃんが話してくれた、むかしむかしのお話です。

ある山おくの小さな村に、病気にかかっているお母さんがいました。お母さんの病気はとても重く、ふうの薬では効き目がありませんでした。

そのお母さんには一人の娘がいて、名前はさくらと言いました。さくらは、毎日のように、お母さんの病気がどうしたら治るか考えていました。

ある日のこと、さくらは「おきらい」という海辺の小さな町に、どんな病気でもたちまち治してしまうという、とてもよい薬があるということを知りました。そこでさくらは、おきらいという町に行くことをすぐに決めました。

町に着くと、さくらは海岸を目指しました。さくらは、ずっと山おくの村の中でそだったもので、一度も海を見たことがなかったのです。初めて見る青くきれいで大きな海に、さくらはとても感動しました。さくら

が海をながめていると、一びきのカモメが話しかけてきました。

「お前は見たことがないな。この町のやつじゃないな。」

「はい、私は山おくの村から、薬をさがしてやってきました。どんな病気にでも効く良い薬を見たことはありませんか。」

さくらがたずねると、カモメはゆつくりと話始めました。

「この先のホレイという島に大きなどうくつがあつて、その中にある大きな貝の中に良い薬が入っている。でもな、その貝は大きなタコが守っていて、貝をとりに来る人間をつかまえて食べてしまうんだ。」

でも、お前がどうしても貝がらをほしいのならば、おともしてくれる仲間を見つけることだな。力を合わせれば、もしかしたら貝の薬を取ることができるかもしれないな。」

そういうとカモメは、北の方へ飛んで行ってしまいました。その姿をみつめながらさくらは、

「ありがとう。」

とつぶやきました。

さくらは少しの間海をながめていました。すると海の中に動く島を見つけました。すいすいと動く様子は、まるで生きてるようでした。しかし、よくよく見ると

それは島ではなくてクジラでした。そこでさくらは、「おい、クジラさん。私を、ホレイ島まで送って行ってくれませんか。重い病気にかかっているお母さんを良くするために、ホレイにあるどうくつの中の貝をさがしているのです。」

と言いました。するとクジラは、

「わかりました。」

と元気に返事しました。

クジラの背中に乗っていると中、サンマやヒラメ、フグにイカもおともしてくれることになりました。みんな、お母さんの病気の話をすると、すぐ力をかしてくれることになりました。さくらはとてもうれしい気持ちになりました。

空を見上げると、雲一つない青空が広がっていました。さくらは、「よし、ぜったい薬を持って帰るぞ！」と思いました。

そしてとうとうホレイ島につきました。そこは、だれも住んでいないようで辺りはかれた木の森になっていました。くらくて不気味なところでした。

ホレイの島の周りをクジラに乗りながら見渡していると、大きなどうくつが見つかりました。

入り口もとても大きく、クジラに乗ったまま入って行くことができそうでした。

さくらたちは、おそろおそろどうくつの中に入って行きました。どうくつの中は、とてもくらく、何もみえませんでした。あまりにまっくらなので、さくらは、これい上進むのは、むずかしいと感じました。

するととつぜん、おとものイカがピカピカと光りだしました。それと同時にどうくつの中も明るくなり、どうくつのおくの方まで、はつきりと見えるようになりました。さくらは、イカに向かって大きな声で「ありがとうございます。」と言いながらニツコリ笑いました。

どうくつのおくへおくへ進んでいくと、何やらキラキラ光る宝石のような物が見えてきました。目をこらしてよくよく見ると、それは大きな貝でした。さくらは、

「やった、見つけた。」

とさけびました。

その次のしゅん間、海の中から大きな物が顔を出しました。それは、さくらの三倍もありそうなほど大きなタコでした。

「何をしにきた。」

と低い声でタコが言いました。さくらはこわい気持ちで必死におさえながら、

「今にも死んでしまいそうなお母さんのために、その貝の中にあるという薬がほしいのです。」

と言いました。するとタコは、いきなりみんなをつかまえようと八本の足をのばしました。

おどろいたさくらたちはバラバラになって逃げました。

イカはイカすみをはいて、タコの目をくらませました。ヒラメとクジラはタコの体に力強く体当たりをしました。

フグはふくらんで体中にハリをだしてタコをさしています。

しかし、タコは、とても強く、おとたちのこうげきは、全く効いてはいないようでした。

さくらもスキを見て貝を採ろうとするのですが、タコは三本の足で、ずっと貝を守っているために、まったく貝をとることができません。

さくらたちが少しつかれてこうげきをやすんだ時でした、タコはいきおいよくすみをはき出し、さくらたちの目をくらませました。そして、八本の足をブンブン振り回してさくらたちに当ててきました。

タコの太い足をぶつけられたさくらたちは、遠くの方まで飛ばされてしまいました。

「もうだめ、やられてしまう」、そうさくらが思った時でした。どうくつの入り口の方から大きな音が近づいてきました。そして、「おい、仲間を連れてきて

やったぜ。」

と、どこかで聞いたことのある声がどうくつの中にひびきました。さくらはおどろいて声の方を見てみると、アンコウの光にてらされながら、あのカモメがパタパタととんでいます。

どうくつの中にはたくさん仲間が集まってきていました。数を数えてみると、なんと七十八ぴきの魚がいました。その魚たちは、みんなたいまつを持っていた。

「このタコは明るいのが苦手なんだ。だからたいまつを持ってかこんでしまえば、タコはにげていってしまいう。」

そうカモメは言うのと、

「よし、かかれえ。」

と大きな声で合図をしました。

たいまつを持った七十八ぴきの魚たちは、タコの周りをグルリとかこみました。そしてたいまつをいっせいにタコの方へ向けました。

するとタコは、八本の足で目をおおいながら、

「やっ、やめろ。うわあ。」

といいながら、ヨロヨロとどうくつのかべにぶつかりながら外へ出て行ってしまいました。

さくらは大きな声で「やったあ」とよろこびの声を

上げました。

さくらは、どうくつのおくにあった貝の前に立ちました。よく見ると、ピンク色でもきれでした。

貝の口はゆっくりと開きました。中には、薬ではなく何かのタネが入っていました。

薬が入っていなかったもので、さくらはガツカリしてしまいました。そこでカモメが、

「とりあえずそのタネをうえてみよう。」

と言い、みんなで貝があつた場所にうえてみることにしました。

すると不思議なことに、うえるとすぐに芽が出てきました。芽が出たかと思ったら、ドンドン大きくなって、カキの木になりました。そして、大きくなってきれいなカキの実がなりました。

さくらはそれをもぎとり、お母さんのために帰って帰ることにしました。

さくらとカモメ、それにたくさん魚たちは大よろこびでおきらいの町に帰りました。

おきらいの町につくとすぐに、カモメとサンマとクジラとイカ、ヒラメ、フグそれと七十八ぴきの魚たちとおわかれをしました。そしてさくらは、いそいでお母さんの待っている山おくの村に帰りました。

お母さんの病気はますますひどくなっているようで

した。すぐお母さんに持って帰ってきたカキの実を食べさせました。

すると、今までどんな薬も効かなかった病気はうそのように良くなっていき、お母さんはどんどん元気になっていきました。

そして、二、三日もするとお母さんの体はすっかり良くなってしまいました。

お母さんの体が良くなると、さくらは、おきらいで体験したカモメたちとの出会いやタコとの戦いの話を何回も話しました。

それからさくらとお母さんは、いつまでもいつまでも幸せに暮らしました。

水仙の花が教えてくれたこと

末崎小学校五年 尾崎 萌

「今日は、転校生が来る日かあ。」

と夢はつぶやきました。いつものように田中先生が教室に来て、その後からポニーテールをした子が入ってきました。

「今日からこのクラスに入る子よ。あいさつをして。」

「私、東京から来た、佐々木亜美です。よろしく。」

その、堂々としたあいさつに夢はびっくりしました。

「あなたの席は、あそこよ。」

と先生が言いました。先生が指差したのは、夢の前の席でした。

「わ、私、海野夢です。よろしく。」

「夢、良い名前、よろしく。始めまして佐々木亜美。」

よ・ろ・し・く。」

亜美の元気な声は教室中に響きわたりました。

「あ、亜美さん。ちよつと声のボリュームをさげてくれない。」

こうして内気な夢と、活発な亜美は出会いました。

二人はいつも海に向かって下る椿坂を手をつなぎながら一気にかけて下りました。夢は亜美といるととても楽しく、時の流れも忘れるほどでした。

そして夢達は六年生となりました。

「もうすぐ卒業式だね。」

「夢は卒業式泣く？」

「泣くかも。」

と夢はふざけて泣くまねをしました。卒業はさみしいけど、中学生になるのが楽しみでもある二人でした。

「ねえ亜美。今日碁石のラベンダー畑で放課後待ち合わせね。」

「オッケー。」

こうしてあの日もいつもと変わらぬ日でした。二時四十六分までは…。

ちょうど五時間目が終わるころ、ものすごい地面から伝わる強いゆれが教室をおそいました。かべがくずれ落ち、つくえの下にもぐった子供達の悲鳴が亜美の耳に聞こえてきました。全校生徒が先生の指示のもと校庭に集められました。そうしている間にも強い地震が何度も大船渡の町をゆらしました。後に知ったことですがこれが東日本大震災だったのです。

「夢の家は大丈夫？」

思いきって亜美は聞いてみました。

「やばいかも…。」

校庭から見える津波におし流される家々。夢とみんなは絶望しました。ふつうにあった物、景色、大切な命。

全て夢のように無くなりました。

それから数ヶ月後家を失った人々のために仮設住宅がいたるところに建ち並びました。夢の家も校庭に建てられた仮設になりました。

「せまくてごめんね。」

「大丈夫。私せまいの好きだし。」

亜美は笑ってピースをしました。

そんなある日、二人は、近くの森に行くことにしました。

「夢、椿森に行こう。」

「え、あ、うん。ちよつと待ってよ。」

「早く早く。行っちゃうぞ。」

と亜美は夢を待ちながらもふざけて言いました。森に着いたとたん、

「よし、おにごっこしよう。」

「二人で？」

「そう、二人で。夢がおにね。」

と夢と亜美は二人だけにもかかわらず日がくれるまで遊びました。

次の日、夢と亜美がテレビでニュースを見ていました。

「亜美、ニュースでは復興って言ってるけどいつまでこんな生活が続くのかなあ。」

「本当だよね。何か私達にできることあるかなあ。」

亜美はどこにぶつけていいのか分からない感情のままにうでを組みながら言いました。

「そうだ。私にいい考えがある。」

亜美はその場に立ち上がりました。

次の日、夢達は仮設の人々を訪ねて歩くことにしました。

「こんにちは。私達、今仮設の人の悩みを聞いているのですが、よろしいでしょうか。」

「ああ、別にいいよ。おれは家はもちろん全てを失ったんだ。おじさんの悩みは友達があまり来なくなったことかなあ。」

「なるほど、友達ですか。」

亜美と夢は元気づけるかのように大きくうなずきました。

仮設訪問を終えた二人は気づくと津波でうばわれた土地に来ていました。するとだれも植えていない場所に一本の水仙の花が咲いていました。

「わあ、きれいな水仙。」

「本当だ。でも、何でこんなところに。」

「水仙ってだれも何もしなくてもこんな土地でも咲くらしいよ。」

夢は得意気に亜美に説明しました。

「よし夢、水仙を見てたら私もつと元氣もらっちゃった。私達にできることをさがそうよ。」

「うん、亜美ならそう言うと思うってたよ。亜美はやさしいからね。」

「ありがとう。何しようか、私達にできることかあ。」

「ねえ、花を植えるってのはどう。」

亜美は夢の思いつきに最初はびっくりしたけどすぐに賛成しました。

「よし、地域の人達に呼びかけて協力してもらおうよ。」

「うん。今すぐ行こう。」

夢達はすぐに地域の人達に呼びかけを始めました。

「みなさん、あれた土地に花を植えてきれいな花畑にしましょう。協力お願いします。」

「おじさんにも手伝わせてくれ。」

と夢達に賛同してくれたのは、あの時、友達が欲しいと言ったおじさんでした。

「まず、ここから花畑にしていこう。」

「そうね、水仙だけじゃ足りないわ。」

ここからと言ったのは夢達が見た水仙が咲いていた場所でした。みんなはチューリップやパンジーなど春の花を植えました。日がくれるまでみんなは植え続けやうと全部植え終わりました。

「やうと終わった。」

「咲くのが楽しみね。」

と協力してくれた人達の顔を夕日が照らしました。みんなは達成感を感じたのです。

「一生けん命に植えたからきつときれいな花畑になるよ。」

元氣よく言ったのはやはり亜美でした。

次の日から大船渡の人々は変わり始めました。自分達で町を新しくつくり出していく案が、次々に出され実行されていきました。

こわれた物は作り直したり、ない物は作りあげて前よりとてもきれいな町になりました。

「みんな。すごい、すごいよ、夢。」

「うん。町もきれいになってる。津波でやられた大船渡の町だったなんて思えないよ。」

夢達はとてもびっくりした顔をしていました。

それから大船渡も大船渡の人々も変わりました。絶望していた人も悲しい思いをしていた人も今はみんな喜びに満ちあふれていました。大震災からの復活、復興。みんなで力を合わせればできることはできると知った亜美と夢でした。

「夢、私この町に来て良かった。大震災はこわくていやだったけどみんな協力できたし良い町だったもつと知れた。夢にも会えた。」

「亜美……。ありがと。私も亜美に会えて良かった。」

二人はもつと仲が深まりもつと信頼し合えるようになりました。二人の心は成長しました。大船渡の人々は二人から元気をもらい明るくたくましい人へとなり自分達で何かをしようとする人にもなりました。

「夢、私達もこんな人になろう。人助けとか自分達ですすんでやろうとする人になろうよ。」

「そうだね。できることはやるようにしなきゃね。」
改めて自分達でやろうとする心を持った二人でした。

それから十年。夢達はもう大人になりました。大船渡もすっかり変わりました。自然がもつと広がり、景色は見たすかぎりの緑色でした。海には、いくつもの養殖だなが浮かんでいます。

「亜美、きれいなね。私達の町大船渡って私本当に大好き。」

「私も好き、この景色が見たかった。」

「私達にあの震災は大事なことを教えてくれたのよね。」
浜風が、夢の長い髪をゆらしました。

「私ね、夢のいいところ知ってるわよ。例えば夢はだれにでもやさしいでしょ。たとえ虫でも物でもね。」

「だってかわいそうよ。私には聞こえるの。虫や物の声が。虫がつぶされたらなぜか痛いよーって聞こえるような気がするし、物がらんぼうにあつかわれていても、痛いって聞こえる気がするのよ。」

「そうね、命の声よね。」

「そう、命の声。」

「負けなかったわね、私達。」

「ええ、負けなかった。この町も笑っててみんな笑ってるわ。何か私もうれしい。私が小さいころとは、ちがう大船渡になったけど、私この新しい町も大好きよ。」
「小学生の大船渡の景色は今の船渡からは想像もつかないわ。私達もこれから良いからすてきな未来を

つくっていきましようね。」

と亜美は目を輝かせながら夢に言いしました。

「ええ。どんなことがあっても、夢をもって力を合わせればきつとまた花が咲くわ。」

亜美と夢は、未来を夢見てる小学生のころみたいなすてきな笑顔で大船渡の景色を眺めました。

神風く神の力で何かが起こる!!

猪川小学校六年 菊 地 織 江

「いやー!!今日は、ウニやアワビ、いろんなものとれたね。」

「ほんだあねえ。」

「震災。ていうつらい事があつたけど、前みたいにつぺえとれるようになったがえ。」

そよそよ…。ガサガサ…。

生ぬるーい風が吹いてきた。

「今、風吹がねがつたが?。」

「えっ?他の木、ゆれでねえよ。」

「なんだか、おがすねなあ。」

とゆれている木々の方を見ると、暗やみの中からボヤーと大きな影が見えた。

「ん?!。」

その中からギリリと光る二つの光。林の間からかすかにもれる月あかりに照らされてぶきみに輝くするど

い刃。
やいば

「じえっ!!。」

村人達はあまりのこわさに、こしがぬけてしまった。

ガラガラ声の地なりのような低いうなり声で、

「ス…ミ…マ…。」

「ギヤー!!。」

と言つて逃げていつてしまった。

「あーあ。とうとうこの町もだめか…。今日は、かぜひいて声もガラガラだから仕方ないか…。」

黒い大きな影は、村人が逃げていった道の方へ歩きながらそうつぶやいた。

光をあびたその正体は、熊のように大きく、目はカツと見開き、鼻は、あぐらをかいたように、顔の真ん中にじんどり、口はオオカミのような口。そして耳は顔に似合わずかわいい小犬のような小さい耳。この人

の名前は、我々二がに権ごん。

「キャツ!!。」

突然出てきたへびに思わず悲鳴をあげた。なんとも、顔に似合わず、臆病者だった。

ある日のこと、五十年に一度という体験した事がない大雨が降った。雨宿りする場所もなくいつものように雨にうたれながら、歩いていたが、

「これじゃだめだ。休む所をつくろう。」

腕のある権さんは木を見つけ、小さな小屋を建て、そこで休むことにした。が、かぜをこじらせ、小屋を建てたつかれもあり、権さんは、寝こんでしまった。そこへ、雨宿りをする所を探していた、そして、その道を通りかかったおばあさんが、

「あんやつ!!こったな所さ小屋あったがな。まんず、休むべ。」

中に入ると、

「バツ!!こったなおっきい男見たことねえこと。あんだあ、大丈夫か?。」

「……。」

おばあさんは、とりあえず、権さんをあたたためるため、たき火をして看病をした。しばらくして権さんが目を覚まし、

「ここはどこ?。」

とつぶやくと、

「大船渡だ。」

「おばあさんが助けてくれたのですか。オレの事怖くない?。」

「なんともねえよ。オラ、マナグがよく見えないけど、なんとなくオメ様のことが分がるよ。」

「オレ、何かお礼したいけど、何かあるか?オレにできることはこんな小屋しかつくれないけど……。」

「バツ!!こんな立派な小屋つぐったの。でも何もいながら、オラもこの小屋で雨宿りさせてもらったがら。」

「でも、何か……。」

「んだば……オメ様、オラの家の屋根つこなおしてもらえねえべが。」

「そんなことなら任せろ!!。」

そして2人は、おばあさんの家に行きました。

「腹へってねえが?まずマンマ食えや。」

メニューは、サンマのすり身汁、大根のナマス、煮つけ、白ご飯。しめには、黒砂糖とくるみがたっぷりのかまもちでした。

「……。」

「口さあわねえが?マズイが?。」

「いや……。こんなおいしいご飯初めて食べた。こんなのが毎日食べられたらなあ。」

「そうか、そうか。久しぶりに喜んでもらっていがった!!もし、オメさんが、いがったらしばらくここにい

てけんねえべが。」

「いいのか？こんなオレがいても…。」

「いがす、いがす。」

怖い顔の男が、おばあさんの家に住みはじめたうわさが広がるのは、すぐの事だった。

「ばあさん。オメエ本当にあの怖い顔の男と一緒に住んでんのか？何されるか分かんねえぞ。」

と言われるが、おばあさんは、

「権さんはそつたな事、絶対にしねえ優しい人だ。」

と周りからの言葉に耳をかたむけませんでした。

それから何日かしておばあさんがぬいものをしようとする、眼鏡がない事に気付きました。家中探している、権さんが、

「何探しているの？」

「眼鏡どこさかやってしまつて。」

「そうか。じゃあ、すこし目つぶつてみて。」

そう言うと、権さんはおばあさんの前に立ち、おばあさんの目に手をかざすと、大きい口で「カッチカッチ」と二回歯をならしました。

「目、開けてみ。」

おばあさんは、おそろおそろ目を開けてみると、
「ばっ!! はっきり見える!! いがったー。これでぬい

ものができる。オメさん何したの。」

権さんに何をしたのか聞いても権さんはニツコリと笑うだけで何も答えてはくれませんでした。おばあさんは不思議に思ったが権さんが話さないのでだまっていました。

また何日かして、おばあさんが村人達と、山仕事に行き、思わぬアクシデントにあい、こしを痛めて村人達に運ばれて来ました。

「大変だ。おばあさんが、こしを傷めて、苦しそうだ。

誰か助けてくれる人はいねえが。」

家の中から権さんが出てきて、

「どれどれ。」

おばあさんのこしに手をかざして、前のように大きな口で「カッチカッチ」と二回歯をならしました。すると、おばあさんのこしの痛みがまたたくまになくなり、動かせるようになりました。

「おー!!。」

村人達の喜びの声が…。それ以来権さんは村人から人気者になりました。

「お前は、怖い顔してるけど、すごい力をもっているし、心は優しい男だな。」

「神様みたいな人だな。」

「悪いうわさを言つてごめんな。」

と口々に村人達は権さんに言いました。そして村長さんが、

「これから、この村が安心して楽しく暮らせるように権の顔に似た守り神をつくるべ。」

と言ひ、力を合わせて作るようになりました。男衆は、木を切ったり、ほったりして顔をつくりました。女衆はおばあさんに習ってぬいものをして胴をつくりました。

その後、村人達はケガをせず、震災にもみまわれずに仲良く暮らしました。

それが、現代の大船渡のお祭りやお祝い事で使われる権現様になったと言われています。



奨励賞

【中学生部門】

小さな旅

末崎中学校一年 武田 果穂

岩手県大船渡市の碁石海岸には、リアス式海岸の荒波に削られ三つの穴があいた『穴通磯』という美しい

岩がある。そこには、

『穴通磯の穴をくぐると子宝にめぐまれる』とか、『丈夫に育つ』とか様々な言い伝えがある。

これは、その言い伝えに関係があるかもしれない、とある少女の物語。

「はあ…」

揺れる赤いバスの中で少女——茜は、ため息をついた。

母とけんかをして、家から飛び出したのだ。

もちろん家出は初めて。どこに行けばいいのかわからない。

気づいたら、

「ここどこ…」

自分の知らない土地に来ていた。

バス停の名前は、「細浦」

「細浦…？」

「ちよつと気になるな。」

そこで降りたものの、どこへ向かえばよいか悩んでいるうちに、次に来た青いバスに乗ることになった。

バスに乗って、数分。うとうとしているうちに、

「…ぎは碁石海岸——碁石海岸。終点です。」

「え？」

降りてみた。

「つと。うわあ、いかにも自然って感じだな。ここ。」

山があつて海がある。…ついでに虫もいっぱいいる。

あ、でも、お土産やさんやキャンプ場もある。

「世界の椿館・碁石か。椿がいっぱいあるのかな。」

…なにあの道。海？」

観光客も数人いるので、そのまま散策してみることにした。

「乱暴谷…雷岩…あれが千代島か。」

遊歩道をひたすら歩き続けると、「穴通磯」という看板を見つけた。アルファベットのMのような形の岩のイラストが描かれており、何だか心がはやり、見に行くことに決めた。

「穴通磯。うわあ、本当に岩に穴がある。」

「お嬢ちゃん。ここに来るのは初めて？」

突然、後ろから声をかけられた。

「え？あ、はい。」

「親御さんは？はぐれたの？」

「あ、いえ、違うんです。…その、一人旅、です。」

「まあ、それなら、ちよつと面白い『船の旅』をしてみない？」

「どこへ行くんですか？」

「今、あなたが見てきた景色を海から眺めるの。」

「へえ…」

「あ、そうだ。私はハル。」

「私は茜です。」

「茜ちゃんね。さあ、行きましょう。」

着いたのは、「遊覧船発着所」と書かれた看板の前だった。

そこには、ハルさんのだんなさんだという、よく日に焼けたおじいさんがいた。

「この子が、一人で碁石に来たんだと。乗せてけで。」

「おう、乗らい乗らい。あべ、あべ。」

揺れる船におそろおそろ乗ると、カッコ舟とよばれる小型の船は、すごい速さで進み出した。

まるでジェットコースターに乗つてするようなスピードと爽快感だ。

水しぶきが顔にかかる。冷たい。しよっぱい。きもちいい。

おじいさんが波に負けない大きな声できいてきた。

「穴通磯はもう見だべが。」

「はい。あんなに穴を開ける波もすごいですし、けずられてもくずれない岩もすごいです。とてもキレイでした。」

「そうが。上から見んのもすんげえが、下から見つともっとすんげえぞ。」

おじいさんは、船を加速させた。
私は、けんかをした時の怒りを、すでに忘れてしまっていた。

その時、スピードがゆるんだため、上を見上げると、そこは、あの穴通磯のすぐそばだった。

「うわぁ、大つきい！」

大きな岩と大きな穴が、そこにあった。

「んだべ。これが下が見だ穴通磯だ。」

「すごい迫力！この穴つて、通ることはできますか？」

「おう。んじゃ入っぞー。」

三角の、穴の形に切りとられた景色を正面に見ながら、船はゆっくりと穴に向かって進んでいった。

穴の両側の壁が迫ってきた時、急に、目の前が暗くなり、波が岩に当たる音だけがきこえていた。

「ん……」

目を開けると、そこは、海でも、船でもなかった。

「あれ、私今船に……」

『お母さんお母さん!! 海に早く行こーよー!!』

『はいはい。』

小さな女の子が浜辺で遊んでいる。私もあのくらいの時に初めて海に入ったんだっけ。

『うつわぁ見て見て!! 青いっキレイっ早く泳ごー!!』

『そんな近づいちゃ危ないよ。すべるよ。』

『だーいじょーぶだよ!! ってうわぁぁ!!』

『ちよつとあぶないっ』

ドッポーン。足をすべらせて頭から海水をかぶったらしい。

『大丈夫!!』

『ぜーんぜーん平気!! 冷たーい!! うえっしょっぱぁ!!
おかーさんもおいでー!!』

大丈夫そうだ。

あの子、昔の私にそっくりだなあ。というか、私の初めての海水浴の行動と一緒に……。

今更だけど、お母さん困ってたなあ……。

いつも話半分で行動してしまうんだよね。

……ごめん。

「ん? ごめん? なんで? ……あ、けんかだ。忘れてた。」

この碁石海岸に来て、おじいさんとハルさんに会って、私、ケンカのこと忘れるくらい楽しかったんだ。

それと同時に海の思い出も、お母さんの見守ってくれている愛情も、呼びおこしてくれた。おそるべし、碁石海岸。

——この短い旅から帰ったら、お母さんに伝えよう。

自分の言葉でごめん。って。ありがとう。って。

そこでまた、目の前が暗くなった。

「…い、おい、大丈夫か。」

「ん…ん？」

そこは、おじいさんの船の上だった。

「大丈夫か？よったか？」

「大丈夫です。長くねてしまつてすいません。」

「たつた三分ぐらいだ。謝る必要ない。」

「え？」

たぶん二時間くらい経つたと思うんだけどな…

「よし！穴くぐつて帰つか！」

「はい！」

また船が動く。スピードを落としてくれたので、ゆっくりと眺める。

ごつごつしている。近くで見るとでこぼこなのに、遠くから見ると丸いって…すごい。

穴をくぐりぬけて、ひとつ大人になれた気がする。

穴をぬけて、スピードが上がる。が、来た時よりおちている。ようのを心配してくれてるのかな。

「よし。着いだ。」

「ありがとうございます。」

「お、なんがすつきりしている顔だ。いがつたいがつた。」

「はい！今日はありがとうございました!!」

またバスに乗る。揺れながら、考える。

（おじいさん達にまた会えるといいな。…帰ったら、お母さんに「ごめん」と「ありがとう」って言おう。）

ガチャ。

「ただいま!!お母さんつ、ごめん。」それから、
「いつも、ありがとう。」

奨励賞

【一般部門】

海色の手紙

渡邊 和 恵

海の匂いかな。

かおりは届いた手紙を胸の前で抱きしめ、眼を閉じて、そつと息を吸い込んだ。

行つた事のない、大船渡の海の匂い。ゆっくりと目を開けると自室の勉強机の前にペタリと座り込んで読み始めた。

かおりちゃん、元気ですか？

返事がおそくなつてごめんね。

いよいよ六年生です！始業式なのに、宿題山もりだよ。春休みはかおりちゃんたち短いのに、開始は一緒だよ。岩手と栃木で色々ちがつて面白いです。

あのね、ビッグニュースがあるの。お兄ちゃんの野球部が、県大会でベスト四になりました。えっとね、これは三月の話です。

今日、久しぶりに支援物資をいただきました。図書カードだよ。へえー、まだもらえるのってカンジ。だって、もうみんな地震のことなんて忘れているでしょう？今も仮設住宅がいっぱいあるなんて、関東の人は知らないよね。あつ、かおりちゃんとは別だよ、前に書いたでしょう？名誉岩手県民だからね☆

そういえば、お友だちとはどう？私もクラスに一人、どうしてもダメな子がいます。その子が近づくと、体中から針が出て、気分はハリネズミ！さりげなく、離れたる事を繰り返していたら、あんまし来なくなりました。本を閉じるみたいに急にはいかないけど、ゆっくりに、離れていけるとイイね。また様子を教えてください。かおりちゃんの手紙、いつも楽しみに待っています。

兼田 香織

薄いピンクの便箋に大人びた字で書かれた名誉岩手

県人、の言葉に、かおりは微笑んだ。

優しいんだから、香織ちゃん。

座ったまま、手を伸ばして勉強机の引き出しを開けた。小ぶりのクッキー缶を取り出し、フタを開けて、中の封筒の数に響いた。

もう、こんなに溜まっている！そっか、一年以上経つんだ、文通を始めてから。

二年前の東日本大震災で、かおりの住む栃木県も大きな被害を被った。自宅の食器棚は倒れ、和紙でできた電気の傘がボロボロになった。ガラスの花瓶が落ちて割れ、床一面水浸しの上にガラスの破片が飛び散っていた。お父さんの本棚は倒れなかったけれど、中の本は全部床に落ち、本棚自体がずれた。それで十分ショックだったのに、ニュースで見た宮城県と岩手県の津波の映像はすご過ぎて、その夜は余震とショックで眠れなかった。

四月になって、かおりはボランティアクラブに入った。第一希望の料理クラブも第二希望の手芸クラブもじゃんけんで負けたからだ。あーあ、クラブで道路のゴミ拾いか、とがっかりしていたら、五月の初めてのクラブ活動が、被災地の小学校へのメッセーじ書きだった。あの津波の映像を思い出してドキっとした。そ

して、現地の同い年の子の事を考えた。

私と同じ年で、地震で家が壊れたり、津波で家族を亡くしたりした子がいるんだ…。

始めは、がんばって、負けないで、と書いた。でも、違う気がして、自分の事を書いた。

【私は小学校四年生です。家の中は地震の時めっちゃになつてビックリしました。計画停電は不便です。でも、もつと大変な人たちもいるから、私もがんばります。どうか、皆の心が楽になりますように。持田かおり】

バカみたいだけど、書いて涙が滲んだ。

バカみたいだけど、読んで涙が滲んだ。

小学校の渡り廊下に貼り出された、栃木の小学生からの寄せ書きだった。

キャッシュカード二枚分ほどの小さな紙を埋めるのに苦労したのが良くわかる。ほとんどのカードは、大きな字でおきまりの文句が書いてあるだけだった。【がんばってください】【負けるな、応援しています】

へえへえ、言うのは簡単だよ。他人事だ。

初めは、そんな風に思わなかった。見ず知らずの小学生在、オレらを応援しているんだって励まされた。寄せ書きと一緒に届くノートやドリルや通学バックも、

ありがたかった。

オレン家は高台で、家ん中が滅茶苦茶になったけれど、まあ、物は掘り出せた。でも、同級生の中には、家が津波で流された奴もいて、ホント、学用品は皆喜んでいたんだ。

でも、さあ、地震から半年くらい経つと、いただけるありがたい支援物資も、ダブついてきた。ありますよって断れないし、いきなり送られてくる寄せ書きも、もらったら、どっかに一応貼らないといけないし…：センセーたちも、結構うんざりしていたと思うよ？オレの推測だけどね…。

そんな気分で、横目で寄せ書きを見ながら廊下を歩いていたら、妙に小さい字のカードが目についたんだ。

一生懸命、考えて書いたのが、伝わって来た。四年生、ああ、香織と同じ年だ…：そう思って名前を見てドキッとしました。

その子の名前もかおりだったから。

一瞬、香織がオレに向けてカードを書いたのかと錯覚した。下唇を強く噛みしめた。

そんなことはない。香織はもういない。

香織ちゃん、お手紙ありがとう。

ねえ、この前もらった手紙を数えたら、十通になっ

ていたよ、ちょっとすごいよね。初めての手紙は栗色の封筒、紅葉の模様が入っているのね。大切にとってあるんだよ。

友だちの事、心配してくれてありがとう。さりげなくを実行中です。

香織ちゃんの学校は、修学旅行どこ？うちらは東京、スカイツリーに行くんだよ。メツチャ楽しみ♪写真撮るから、可愛く撮れたら送るね。香織ちゃんも送ってください。

学校の図書館で、香織ちゃんおすすめの『UFOのくれた夏』見つけました。おもしろいね！読み終わったら、感想を書きます。

ではでは、またね。

持田 かおり

足先が白い黒猫のイラストが入った便箋をたたみながら、優人は大きくため息をついた。

十通か：もう、そんなになるんだ。

中学の制服を脱いで部屋のハンガーに掛けながら、優人はもう一度ため息をついた。Tシャツとジャージに着替えると、右手に野球バグ、左手に今読み終えたばかりの手紙を持って階段を勢いよく降りて行く。

「優ちゃん、野球？」

台所にいた母親が声を掛けた。

「うん。今日は上のグラウンドだから、車出さなくていいよ」

言いながら優人はテーブルに手紙を置いた。

「あつ！来たのね、手紙！」

「行ってきます」

母親がいそいそと手紙を開くのを横目で見て、優人は玄関に向かった。三和土に座^{たたき}って靴を履きながら振り返ると、母親は立ったまま、微笑んで手紙を読んでいる。いつもよりもずっと柔らかいその笑顔に、優人はほっとした。

カッキーン。

芯を捉えた感触がして、バットを大きく振った。打球が真っ直ぐ飛んで行くのを確認し、優人は一塁を回って二塁ベースに向かった。砂ぼこりが舞い上がり、喉の奥に詰まって息が苦しくなる。

そんなつもりじゃなかったんだ。

香織を騙すつもりなんかなかったんだ。

心のこもったメッセージが嬉しくて、ただ、ありがとうって伝えたくて、栃木の小学校に、持田かおり様宛に手紙を送った。

お礼の言葉と、最近の大船渡の様子を簡単に書いて、最後に自分の名前の代わりに、津波に流された妹の名前を書いてしまった。なんだか、妹が生きていて、同級生の女の子に手紙を書いたみたいで、ポストに入れた時は嬉しかった。

だって、返事が来るなんて思わなかったから。なのに、かおりちゃんは学校宛に返事をくれた。兼田香織様宛の手紙は不思議がられながらも、六年の兄のオレに回ってきた。学校経由じゃまずいと思って、自宅の住所で返事を出したら、かおりちゃんも家の住所で返事をくれた。文通がはじまり、オレが中二に、かおりちゃんが小六になったこの春で、もう一年半だ。

「兼田、ア－ウト！」

二塁でタッチアウトされた。すごすごと戻りながら見上げた空は、鮮やかな青色だ。

あの日も、空だけは青かった。

地震から三日して、公民館の遺体安置所で香織を見つけた時。獣の様に泣きわめく母さんを抱きしめながら、父さんと二人がかりで外に引っ張り出し、落ち着くのを待つ間見上げた空も、ぬけるように鮮やかだった。

運が悪かったんだ。学校が早帰りで、幼稚園からの

友だちの家に遊びに行った香織は、川沿いのその家で津波に吞まれた。

ずっと抜け殻みたいだった母さんが、オレが見せたかおりちゃんの返事を見て、日が射した様に微笑んだ。だから、オレは文通を終える事ができなくなった。

…なのに、修学旅行の写真？無理でしょ！

「もう大丈夫よ、優人」

その夜、母さんが静かに言った。父さんがお風呂に入っている時に。居間でテレビを見ながら英語の宿題をしていたオレは、言葉の意味がわからなかった。

「えっ？」

「今までありがとう。かおりちゃんの手紙を読ませてくれて。香織の手紙みたいで、すごく嬉しかった。でも、写真は無理でしょう？母さん元気になったから、彼女に本当の事を書いて、きちんと謝って、終わりにして」

何か、ムカツと来た。でも、顔には出さない様に気をつけて、了解の印に黙って頷いた。

香織ちゃん、お元気ですか？

ずっと返事が来ないので、心配しています。忙しいのかな？病気じゃないよね？

修学旅行、大盛り上がりで終わりました。友達に、修学旅行の話がいけなかったのじゃない？って言われたけれど、私、自慢しいだった？ごめんね。そんなつもりないよ。

香織ちゃんの事、手紙でしか知らないけれど、優しく、私より大人で、ちよつと男前だと思っています。とても、大切な友達です。

私がクラスメイトとの関係で悩んだ時も、勉強が遅れて大変だった時も、さりげなくさめて、励ましてくれてありがとう。

二枚目をめくる前に手が止まった。

手紙に写真は入っていなかった。きつと氣を使つたんだろう：ちよつと男前だって？はい、男ですから。ため息。

二こも年下の子にこんな手紙書かせて、オレはいつたい何をしているんだ？

だって、母さんが終わらせようなんて言うから。父さんには何となく秘密だった、オレの唯一の母さん孝行を、あつさりと打ち切るから：オレの今までの苦勞も知らずに！

どっか遠くに出かける度に、文房具屋で女の子っぽい便箋と封筒を探した。買う時は耳が赤くなった。小

学高学年女子の好みや言葉を知るために子ども会の世話役になったし、野球部連中の妹たちにも氣を使って仲良くなった（去年のバレンタインは、そのおかげで人生初チョコをもらったケド）。女子の言葉で手紙を書くのは冷や汗ものだったけど、かおりちゃんに手紙を出すのが、いつの間にかオレの楽しみになっていた：。確かに、地震の二周年行事が終わった頃から、母さんは目に見えて明るく、元氣になった。ずつと仕舞い込んでいた、海色のエプロンも使い始めた。父さんは時薬だって言うけど、オレの貢献もあるだろう？

なのに、写真くれ、の一言にびびって、じゃあ終わらせよう、はないだろう。オレの気持ちも考えろよ！かおりちゃんだって、傷つくだろう、ゼツタイ！！

返事を書かずにぐずぐずしていたら、あつと言う間に六月が終わり、いつもならオレの返事を待つかがおりちゃんが、しびれを切らせて再び手紙を送って来た。

二枚目を読み終えて、息が止まった。

あのね、もう返事来ないかなって思うから書いてちょうけど、たまに、男子と文通している氣がしたの。ごめんっ！怒るかな？だって、考え方が私とちがって理性的で、大人っぽくて：私は、それもとて好きだったの！

夏休みに行きます！ボランティアクラブの先生が熱心で、七月二十九日と三十日は大船渡にいます。小学校で交流会をして、仮設住宅を訪問する予定。私のケータイの番号は〇八〇****です。会えるようなら、連絡してください。会えたら嬉しいです。会いたいです。

持田 かおり

頭の中が真っ白になり、体が熱くなった。落ち着け。かおりちゃんが会いたいのは、香織だ。オレじゃない。

目を閉じて、大きく息を吸い込んで、吐き出す。三回繰り返したら、素直になれた。

はい、オレも会いたいです。会って、きちんと謝りたいです。きつと、すつごく怒るだろう、真っ赤になって、引っ叩かれるかもしれない：でも、オレも会いたい。

どうしよう。手紙を書こうか。それとも、思い切って、ケータイにかけてみようか：いやいやいや、無理無理無理。

ため息。

そうだ、やっぱり、手紙を書こう。

初めの事から全部、ちゃんと説明して、オレの嬉し

かった気持ちを伝えよう。かおりちゃんの手紙がすごく楽しみだったって書いて、それから、今度はオレと文通してくれるように頼もう。最後には自分の名前を書くん。

ケータイあるなら、メル友になれるかな？ううん、それは違う。オレは、時間のかかる手紙の方が、好きだ。多分、かおりちゃんも。

手紙を書いて返事がもらえたら、きつと、七月末に会う事ができる。

オレは部屋から飛び出した。

「あら、優ちゃん出かけるの」

「うん、便箋買ってくる」キョトンとした母さんに笑いながら言えた。「きれいな海の色便箋と封筒を買って、かおりちゃんに手紙を書くんだ」

母さんの笑顔を横目で見ながら、オレは玄関を開けて、青い空の下に飛び出した。

作品集

《小学生低学年部門》

ふしぎないす

末崎小学校一年 おおわだ ひなの

むかし、まつさきのあるところのこうえんのまんなかにおおきないすがありました。百人すわってもこわれません。まちのうわさになって、うわさをきいたひとたちがたくさんあつまってきました。

あつまったひとたちは、いすにすわっておべんとうをたべました。おなかいっぱいいたべたら、おならがでて、みんなわらいました。いっぱいわらったのでねむくなってしまうました。

「あつ、ねちやった。」

と、いいながらおきました。おきて、まわりをみるとあのおおきないすがありません。でも、たくさんのもだちがあそんでいました。たのしそだったもので、いっしょにあそびました。いっぱいあそんだので、ねむくなってしまうました。「あつ、ねちやった。」

と、いいながらおきました。たくさんのもだちは、いなくなっていました。でも、おおきないすはもどってきていました。いまでも、みんながすわっています。みんなふしぎないすがだいすきです。

たのしかったね、森へ行った日

吉浜小学校二年 見せ なな子

三りく町に、どこかに行きたいと思っていたしかの「しかるくん」と、うにの「うに子ちゃん」がいました。

ある日、しかるくんは吉浜かいがんに行きました。すると、うにがぼつかりとうきあがってきました。しかるくんは、そのうにを手にとりました。すると、そのうにが

「ありがとう。おねがい、わたしをどこかにつれてつて。つれてつてくれたらおれいをするわ。わたしの名前はうに子。」

と言いました。しかるくんは「よろしく。」と言いました。

しかるくんはうに子ちゃんをせ中にのせました。そして、ずっとすすんでいくと森がありました。かんばんには「夏虫山」と書いてありました。そこに、しかるくんは足をふみいれました。うに子ちゃんは、「すぐくすてきね。夏虫山はしぜんがいつぱいだもの。」と言いました。

「それに、アスレチックには大きなタワーがあつて、タワーにのぼるとそこからまわりを見ることができし、すべり台であそぶのもたのしい。山なのにさめがいるのもびつくり。小さくてかわいいさめね。」すると、しかる君は、

「きみのうみもすてきだよ。うみはキラキラしてて、夏にはおよげるから。あついときにおよぐとすぐく気もちがいいよ。かつこいいふねもいつぱいだ。」と言いました。

二人でたのしく話していると、花ばたけがありました。うに子ちゃんはお花をつみました。とってもきれいな花でした。

「おれいに、いいところにあんなにしてあげる。」うに子ちゃんが言いました。

うに子ちゃんの言うとおりに行くと、きれいなうみが見えてきました。千ざいかいがんです。

二人は貝がらをひろっています。すずしいかぜがふ

いてきました。二人はニコニコがおでなかよくあそんでいます。

「うみも山もいいね。また、いつしよに行こうね。」

あいちゃんとどうぶつたち

末崎小学校二年 坂本 愛

いちごの大すきなあいちゃんは、大ふなとゆめ小学校に通う元気な二年生です。今日も大すきな天じん山公えんから大すきな大ふななどのまちをながめていました。

「わたしたちの大すきなこのけしき、お家でまっているウーちゃんとハーちゃんにも見せてあげたいな。」

ウーちゃんとハーちゃんは、あいちゃんがお家で大切にしているウサギとハムスターのぬいぐるみです。あいちゃんがねるときは、いつもこの二ひきがいつしよでした。

ある日、あいちゃんがいつものように天じん山へ行き、いつものようにおまいりをしてふりむくと、そこにはあいちゃんの大すきないちごばだけが一めんに広がっていました。

あまいかおりにさそわれて、あいちゃんはいちごを

ひとつ食べてみました。

「わあっ、あまーい。」

「ぼくも食べていい?。」

見ると、そこには一びきのウサギがいました。

「あいちゃん、おいしいいちごだね。ぼくの友だちもよんできていい?。」

「いいよ。みんなであそぼう。」

ウサギの友だちは、犬、ねこ、ハムスター、リス、キツネ、パンダ、ブタ、キリン、ひつじなどたくさんいて、まるでどうぶつえんのようにでした。

おにごっこやかくれんぼ、ブランコにすべり台など、みんなでなかよくあそびました。もちろん、いちごもたくさん食べました。

すると、とつぜん

「ゴゴゴゴゴ。」

ものすごい音とともに、地めんが大きくゆれはじめました。

「きゃー、たすけてー。」

ひ鳴とともにみんなバラバラになってしまいました。

あいちゃんは、一人ぼっちになりましたが、何とかお家へたどりつくことができました。

家でまっていたお母さんは、

「あいちゃん、ぶじでよかった。お母さん、とっても

心ばいしていたのよ。」

「お母さん、わたし、なかよしになったどうぶつたちとあそんでいたの。でも、みんなバラバラになっちゃったの。こわいよう。」

あいちゃんは、お母さんにだきついて大きな声で泣きました。泣きつかれて、そのままねむってしまいました。

「あいちゃん、あいちゃん、もうおきないと学校におくれるわよ。」

目をさましたあいちゃんは、

「お母さん、きのうの地しん、とってもこわかったね。」

「何言ってるの、あいちゃん。きのう、地しんなんてなかったわよ。」

「そうかな、とってもこわかったんだけどなあ。じゃあ、どうぶつたちとなかよくあそんだのもゆめだったのかなあ。」

あいちゃんはどうぶつたちとあそんだことや地しんでみんながバラバラになったことがゆめだったと分かったと、ざんねんなような、安心したような気もちになりました。

「でも、またあのどうぶつたちとなかよくあそべたらいいなあ。」

そう言っていたあいちゃんがウーちゃんとハーちゃんの

方を見ると、二ひきは口もとにちよっぴりいちごをつけてにつこりとあいちゃんを見つめていました。

「ああ、やっぱり・・・。」

あいちゃんはにつこりほほえむと今日も元気に学校へ出かけていきました。

どんぐり太ろう

赤崎小学校三年 竹村 紗耶

二〇十三年のお話です。ある山の中に、くまのおじいさんとおばあさんがすんでいました。おじいさんは盛川へさけをとりに、おばあさんは、「シャボン」へせんたくに行きました。おばあさんは、「おもいおもい」とせんたくものをひきずるようにはこんでいました。おじいさんが二人分のさけをとり終わって着がえていると、大きなどんぐりが目に入りました。おじいさんは、おばあさんがどんぐりが大すきだったことを思いだしました。「おばあさんがよろこぶことだろう。おみやげに持って帰ろう。」

「ただいまー。」

家の中からいいにおいがしてきます。おばあさんは、

おじいさんのだいすきなくりだんごを作っていました。

「おじいさん、おいしいくりだんごができましたよ。」

「こりやうまそうだ。どれ。パクツ。うん、うまい。まい。ところでおばあさん、今日は川で大きなどんぐりをひろったんだよ。」

とあのどんぐりを見せました。

「あらまあ、大きいどんぐりですねえ。切って二人で食べましょう。」

と、ほうちようで二つに切ろうとしたとたん、

「パカツ!!」

なんと中からくまの子どもが出てきました。

おじいさんとおばあさんは、こしをぬかすくらいびつくりしました。子どももない二人は、その子に『くんや』と名前をつけ、大切にそだてました。くまのおじいさんはとてもはながいいので、「くんや」とつけたのです。

くんやは、すすくそだって力じまんの子どもになりました。

ある日のことです。村のカラスが一羽とんできました。

「カアカア。」おにが来た。村におにがきた。

「くんや君、たすけて。」

でも、くんやは、ぼーっとしています。

「はやく！」

くんやは、あわてるようすもなく、

「ちよつと待ってて。」

とカラスにくりだんごを持って来てあげました。

「これを食べれば百人力。一しよに行こう。」

カラスがくりだんごを食べてみると、

「パンパラピンピープーチン。」

もりもり力がわいてきます。

「じゃ、行こう。あっそうだ。」

くんやは急にインクを出してきて、葉っぱに字を書き始めました。そこにはこう書いたのです。

「日本一。」

そのはたを持って、二人はたびに出発しました。

歩いて行くと、キツネに会いました。

「キツネ君、君もぼくたちのなかまに・・・。」

と、そこまで言ったとたん、一まいの葉っぱが落ちてきてキツネの頭にのりしました。キツネは、くんやに化けました。くんやとカラスはびっくり。その葉っぱを取ると、

「ドロドロロン。もどるんだ。」

すると、キツネはもとにもどりました。それから、もつとなかまをさがそうと思い、
「コーン」

と思い切り鳴きました。

そのころ、くんやの家の屋根の上では、ネコがねていました。遠くから聞こえる。

「コーン」

という鳴き声に、くんやに何かあったにちがいないと思ひ、ぱつと木にとびうつり、どんどんとびうつり、声のする方に向かいました。その後ろには、十ぴきの子ネコもついてきていました。

キツネの所にたどり着いたネコに、キツネが、

「一しよにおにたいじに行きましょう。」

と言いました。くんやがぶじだったので安心したネコたちは、一しよに歩き始めました。これでなかまは、くんや、キツネ、ネコ、子ネコ十ぴき、カラスの十四人です。

ついにおにがしまに着きました。着いたとたん、青おにに見つかってしまいました。

おにたちは、ぶきをかくしていました。くんやたちは手ぶらだったので、ぶきをさがしました。そこでくんやの鼻が役に立ったのです。かくしていたくさんのぶきのおいをかいで見つけ出し、手に入れたくんやたちを見て、青おにたちは、

「まいったまいった。どうかいのちだけは・・・。」
とこうさんしました。

ぬすまれた宝を取りもどしたくんやたちは、ちょう
特急で村に帰り、宝を村の人たちに返ししました。

くんやは、そのお札にと村の人からたくさんのお金
をもらいました。そのお金を何に使おうかと考えたく
んやは、

「そうだ。」

とすぐケーズデンキに行きました。そして、せんたく
きを買っておばあさんにあげました。おばあさんは大
喜び。これでおばあさんはもう「シャボン」に行かな
くても良くなりましたとさ。

お・し・ま・い

《小学生高学年部門》

オオフナトン

大船渡北小学校四年 遠藤 文太

ここは、とても遠い未来です。しかも、大船渡の椿
館に、オオフナトンがいっぱいいます。これはオオフナ
トンのお話です。

第一のオオフナトンは、椿の花から生まれました。
そうすると、花が咲くと同時にいろいろなところにあ

らわれて一大ブーム！缶バッジなどのグッズがいっぱ
いいます。全国ゆるきやらグランプリも第二位をかくと
く！仕事が続出です。

オオフナトンは、第十まで生まれました。

このオオフナトン、性格がみんなちがってます。

第一のオオフナトンは、まったくタイプでどんな時
でも、すごく落ち着いています。

第二のオオフナトンは、なんとマジメで、仕事など
もてきばきとおこないます。また、けんかがおこると
おさめてくれます。

第三のオオフナトンは、元気モリモリで、みんなか
ら「モツちゃん」と呼ばれています。いつでもきげん
がよく、陽気でいつでも笑顔いっぱいいます。

第四のオオフナトンは、身体能力がバツグン！なん
と、あのふなっしーより高くとぶことができちゃう！
おどろきのジャンプ力なのです。そして、さらにおど
ろくことに、この前は、とびばこ二十だんをとんでし
まったのです。すごすぎます！

第五のオオフナトンは、ゲームが大の大的得意で
す。仕事先にもゲームを持って行くほどで、どんなゲ
ームでも、一日で攻略しちゃいます。たくさんのゲー
ム会社にゲーム作りのアドバイスをしているそうです。

第六のオオフナトンは、なんとなんと、ぼーっとし

ています。仕事るときもぼーっとしてしまうので、なかなか仕事が終わらず大変です。そのかわり、あまりくよくよしない心の持ち主です。

第七のオオフナトンは、イケメンです！女の子がすぐに周りに寄って来ます。コミックやざっしにのるだけで、ファンがすぐにできてしまうほどののです！

あ、ここまで話を進めておいてなんですが、オオフナトンはもちろん顔も体格もみんなちがっています。でも、見分けがなかなかつかないオオフナトンもいるらしいですよ。

第八のオオフナトンは、何とビックリ！羽がはえています。パータパータと空を飛ぶのが特ちょうで、ずっとどこまでも行くことが可能なのです。飛んで海外旅行へも行ったらしいです。

第九と第十のオオフナトンは、なぞにつつまれていて、性格も不明なのです。後で二人のこともわかるようになるというですね。

ちなみに、第一〜第四までのオオフナトンがイベントに登場すると、つぎの絵のようになります。

今や、オオフナトンは、大船渡の顔。

ライたろうとキンキンのぼうけんへゴー！

末崎小学校四年 小松 真菜

ライたろうとキンキンは友達で、いつも一しょにくらしたいと思っていました。でも、まだ二人は小学三年生です。

「そうだ。今、平公園にいるし、このまま遊ぼうよ。」
「んだな。」

二人はブランコに乗ったり、すべり台でスルスルスべったり。

「楽しいなあ。」

「うん。」

「ねえ、あっち行こう。」

キンキンが走っていると白い物が見えてきました。
「なんでしょうか。」

「何だ。これ。」

「おい、キンキン何してんだ。早く来ーい。」

「ねー、見てよ。何だろう、これ。ちよつと来て。」

「もー、何なんだよ。」

ライたろうとキンキンが見つけたのは地図だったのです。

「これ、きつとぼうけんの地図だぜ。」

「明日から学校を一週間休んで行こうよ。」

「でも、どうやって行くんだよ。親に言うത്『だめ』って言われるよ。」

「作戦があるんだ。それはね…。」

二人の作戦は「行つてきます。」と言ったら、通学路じゃない道をたどつて出発するのです。でも、二人は地図の読み方がわかりません。

「何て書いてあるんだ。○☆◇○☆△☆。」

「うーん。」

「もういいや、とにかく行こう。あ、食べ物をわすれた。」

「大丈夫。持つて来たから。」

「どうも、どうも。」

しばらくして、二人の両親が通学路ではない所を歩いている二人を発見しました。

「こらー。通学路じゃない所を歩くな。もどつて来なさい。」

びっくりして、二人は後ろを見ずに走り出しました。

「こんらー。」

「うひょー、にげろー。」

「待つてー。ライたろう。」

「いそげ。」

二人は碁石海岸の近くにあるどうくつの中ににげこみました。

「はあー、はあー。」

「た、助かったぜ。」

「地図は。」

「ある。」

二人は地図を見ました。

『『ある家から宝物を見つけ、あるどうくつへ来い』って書いてあるよ。』

『『ある家』と『あるどうくつ』か。』

「何か意味があるのかな。」

「うーん。」

考えていたら、もう一日たつてしまいました。二人はどうくつを出始めました。そのしゅんかん。

「あ、あつい。」

「う、死にそう。」

冬だったのが、あつという間に夏になってしまいました。

「うわー、もう夏になるとはね。半そでを持ってくればよかった。一夜すごしただけなのに。」

とキンキンが言いました。ライたろうは「ふーん。」という感じで聞いていました。

「おれは、半そで・短パンも持つて来たんだ。へへ…、いいだろう。」

「いいな。」

ライたろうが外に出たしゅん間。

「寒い。」

「ははは、だまされたー。はーっ、はっはっはっは。」

「よくも、うそをついたな。」

「キャー、にげろー。」

にげまわっていると、キンキンが言いました。

「あ、宝箱。」

「えっ。どれどれ。」

「ほら。」

「えっ。」

「わー、だまされた。」

キンキンもだまされてしまったのです。

「もう、そういうのいいから行こう。もう、午前の五時十分二十四秒だよ。」

「くわしいね。お言葉にあまえて行こう。」

「えへへへへへ。」

二人はどうくつを出て、このどうくつが何というどうくつか調べました。

「あつ。あつたよ。このどうくつ、『みさきどうくつ』だよ。」

「本当だ。書いてあつた。お前、すごいよ。よく見つけたな。」

「いやいや、それほどでも。」

「てれてんじゃねーよ。女みたいだぞ。」

「なんだよ。バカにして。」

「わかったよ。ごめんなさい。」

「それだったらゆるしてやるよ。」

二人がまた、旅に出ようとした次のしゅんかん！

「わー、ラ、ライたろう。地、地図がうかんだー。」

「わっ。すげーな。」

「そういえば、前、『ある家』と『あるどうくつ』って言ったじゃん。」

「うん。」

「それらのある場所を教えてくれているんだよ。」

「そうか。じゃあ、もう少しでぼうけん終了だね。」

「そうかもね。」

すると突然、

「こんにちは。わたしを拾っていただきありがとうございます。ごさいました。お札に宝箱をさし上げます。」

と地図が話しました。二人は宝箱を手に入れ、中を開けてみると……。ん？またまた、地図のようです。

「何？地図だけど……。」

「またあ？何なの？。」

「あつ、『さくらいさんの家から金のかめを持ってみさきどうくつに來い。』て書いてあるよ。」

「今すぐ行くぞ。」

「おーっ。」

そして二人は、さくらいさんの家にやって来ました。しかし、るすのようです。でも、げん関が開いていません。

「早く入って、金のかめを探そうぜ。」

「うん、いそげ、いそげ。」

二人はやつと黄金のかめを見つけました。

「おーい、キンキン、いたよ。」

「おーっ。」

「わー、すげえなあ。」

二人は黄金のかめを大事に持って、みさきどうくつへ持って行きました。

「どこに黄金のかめを置くんのだ？」

「ここか、ここか、ここか？」

いろんな所においてみましたが、どこにおいても光りません。

「最後は、真っ正面だ。」

「よーし、せーの。」

「ポン。」

すると、とつぜん黄金のかめは光り出し、キラキラと光に包まれていきました。

「わー、目が…。ラ、ライたろう。」

「キ、ン、キ、ン。」

そして、光に包まれた二人は光からのがれると、いつしゅんのうちに光が消えてしまいました。

「☆◇○☆◎◇。」

「な、何言ってるのよ。」

「そうだ。二人だけのひみつのどうくつに名前をつけよう。」

「何がいいかな…。そうだ。黄金のどうくつにしよう。」

「それがいい。」

「じゃあ、また来ようぜ。約そくしよう。」

それから、二人はどうくつを出て家に帰り、家族にしかれました。二人の旅はちょうど一週間で終わって、ふつうの生活にもどったとき。ところで、かめは…。ふつうのかめにもどったとき。

サニーとまほうのリボンの大船渡市をたずねて

盛小学校五年 新沼 由唯

ぼくは、サニー。一緒にいるのは、まほうのリボンだよ。ぼくは、もともとは人間の家で育った犬なんだ。ぼくは、四匹のきょうだいの末っ子だったんだ。でも、ぼくは、お兄ちゃんやお姉ちゃんとはいつも仲がよくなかった。もう、すぐくつらくなって、ぼくは、その

家から出て行っただ。家を出てしばらく歩いていると、ぼくの目の前に赤いリボンが落ちていた。すると、その赤いリボンが、とつぜん光った。とてもまぶしくて、目をぎゅつと閉じてしまった。

目を開けると、いつの間にか見たこともない場所に来ていた。そこは、まるで天国のようなあたたかい場所だった。辺りを見てまわっていると、だれかが近づいてきた。それは、神様だった。神様は、さつき見つけた赤いリボンをぼくにさし出すと、こう言ったんだ。「このリボンは、まほうのリボンです。おまえは、このまほうのリボンを持って試練の旅に出るのです。地上の人間たちのために……」

はっ！と目を開けると、もとの場所に立っていた。首には、あの赤いリボンがしっかりと首輪になってついていた。地上の人間たちのために、ぼくは、ちかった。「旅をするというのは、人間たちの世界を幸せにすることなんだ。ぼくはね、人間たちだけじゃなくて他の生き物たちも、幸せにしてあげたいんだ。ぼく、みんなが幸せになれるなら、何だってするよ。」と。そのときから、ぼくとリボンの冒険が始まった。

今回の旅先は、岩手県大船渡市。前回旅をしたところから、ずうっと歩いて来たぼくらは、一週間かけてここに来たんだ。ぼくらのいつもの旅先は、未来また

は過去と決まっていた。でも、どうやら間ちがえて現在に来てしまったみたいなんだ。まあ、せっかく来たんだし、この大船渡市に一週間くらいいることにした。

大船渡市の様子を見てみると、ぼくらは、何だか不思議とさびしいような気がした。建物が少なく、とても静かだ。聞こえてくるのは、海の波の音だけだった。ぼくらが歩いていると、公園があった。その公園は、サン・アンドレス公園というみたいだ。サン・アンドレス公園に、高い塔があった。そのとなりには、鐘があつたんだ。

「何かしら？この塔と鐘は……」

「ううん、何だろうね……」

二匹が、そう言いながら緑が広がっている原っぱを見ていると、一匹の猫が、数匹の動物をしたがえて出てきた。あの猫ちゃんは、何かを知っているかも……

「おうい、ちよつとすみません。」

サニーが猫を呼んでみたが、だれに呼ばれているのかわからず、きよろきよろしていた。

「ねえ、ほら！ここだよ。猫ちゃあん。」

大きな声でもう一度呼ぶと、猫は、サニーに気づいたのか、こっちに走って来た。

「何？私に何かごよう？」

「あのう、このサン・アンドレス公園のあの塔と鐘は、

何のためにあるの？」

サニーが猫に話を聞いてみた。すると、

「ああ、まずあの塔はね、ずうつと前からいろんな人たちがのぼることを楽しんでた物なの。でも、津波が来たおかげで、ほうら！今、あんなじようたいなんだけどね。」

と、言っていた。

「え？うそ……。この大船渡市に津波が来たの？いつ？」

「ええと……、二十一年の三月十一日だったかしら？ま、この私が今、あんたにそのときのことを話すから、聞いていて……。あの日まで、大船渡市はゆたかで楽しい町だった。いろんな人たちが、協力をしてともに生きる、そんな大船渡市民の町だった。大船渡市は小さな町だけど、みんなはとても幸せだった。笑顔で「こんにちは。」とあいさつをすると、あの人もこの人もきらきらの笑顔になる。きつと、そのひとたちは「幸せ！」ってさけびたいくらい楽しいおもいをしていたのかもしれないね。……けれど、そんな楽しい町に大きな魔物がおそって来たの。それが、二十一年三月十一日のあの日のことだった……。とつぜん、大きくゆれる地震がおそって来た。大きなゆれは、三分も続いた。やつとゆれがおさまったかと思っていたけれど、地震だけじゃなかった！海の様子を見てみると、波の動き

がなんだかおかしい。波は、だんだん大きく広がっていくと、町をどんどんのみこんでいった。そのとき私たちは、高台まで夢中で走ってにげて行った……。という話した。」

「そうだったんだ……。そういうことが、あつたんだね。」

「うん。それからね、町の人たちは波に連れて行かれて、家族がはなればなれになっちゃったりしたの。もしかしたら、あの鐘は亡くなった人たちをとむらうためのものなのかもね。」

その夜、サニーは、サン・アンドレス公園の鐘の前で、ねっころがりながら考えていた。

「ね、もしもぼくと君がはなればなれになったら、どうなるんだろう。」

そうリボンにサニーが聞くと、リボンはこう言った。「何を言っているのよ。そんなこと想像したら、私、ぞつとしちゃうわよ。それに、私は、あなたの首輪として永遠についているから、私たちは、はなれたりしないわよ。」

サニーは、あの猫の話を聞いて、サニーのお母さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんといたころを思い出したのだ。「お母さんのことは、好きだったなあ。あのとき好きじゃなかったお兄ちゃんたちのことも気になるなあ。」

「サニー、ねましよう。でも、次の旅にはいつ行くの

よ？」

「ううん、どうしようかな……。ねつ、どうしてもこの町からはなれられないんだ。それにね、ぼく、町の人たちを元気づけたいんだ。いまより、もつともつと幸せな町にしてあげたいんだよ！だから、もうしばらくここにいてもいいでしょ？」

「あ！今、いいこと言ったわね。サニー、じゃあこうしたらどうかしら？」

「何？」

「今日あったあの猫ちゃんたちを呼んで、町のひとたちを元気づけるのよ。」

「わあ、それいいね！明日、猫ちゃんを見つけて話してみよう。」

サニーたちは、目をかがやかせながら、その話をしていった。その名案で、二匹のねむけはふっ飛んでしまった。

次の日、サニーたちは、昨日あった猫たちを集めて話し合った。猫は、まず、自己しようかいと他の動物たちのしようかいをした。

「そうだ、私の名前をまだ言っていなかったわね。わたしは、レオナ。よろしくね。あと、シカさんはノアで、ツバメさんはリリース、そしてノラ犬のペロ。」

「うん、よろしくね。ぼくはサニー。首につけている

のは、ぼくのおとものまほうのリボンだよ。」

「よろしく！」

「ところで、なぜ私たちを集めたの？」

サニーは、みんなにそれをくわしく説明した。すると、みんなは、サニーたちの話を聞いてきょうみがわいてきたのか、

「ようし！ぼくたちや人間たちがいつでも笑顔になれるような場所を作ろう！」

「おう！」

と、かん声を上げ、計画を立てはじめた。

「あのおう、こういうのはどうですか？花をたくさんさかせるというのは？」

と、ツバメのリリースが言うと、

「それならば、広場を作ってみては？」

とシカのノアも言った。

「お、いいねえ！いいよ、みんな。どんどん言って。」

「こんなのもいいかな、あれもいいかな、ああ、確かに、なるほどね。」という感じで、たくさん話をした。

みんなの意見をまとめた結果、動物や人間がふれ合えるような楽しい広場を作ることになった。

サニーは、広場に花をかざるために、天へ向かってお願いをした。

「お願いです。神様！ぼくの願いを聞いて！この町に

広場を作って、花をいっぱいさせたいんだ。いっぱい花かざりをつけて、みんなのたくさん笑顔がみたいんだよ。」

「え、どこに向かって言っているの？」

猫のレオナたちが、天へ向かってさけぶサニーを見てきよんとしている、天からガラス玉のような物が地上に落ちてきた。神様のところに、サニーの声がとどいた合図である。すると、サニーの前で天からガラス玉がわれると、七色にきらきら光り始めた！そのときだった。七色に光るわれたガラス玉があっちこっちにちらばった。

「わあ、何ということだ！あの七色の光が、いろんな花に変身している！」

サニーたちはその光景におどろいて、とまどっていた。

「何？これ、すごい！」

後ろを向くと、町の人たちがわいわい集まってそう言っていた。

「こんなすてきな光景、見たことないよう。」

「なんだろう、これは…。」

町の人たちは、この広場の様子におどろきながら、ほこらしい気持ちで見っていた。猫のレオナたちは、うれしく思っていた。

「サニー、やったわね！みんなに喜んでもらえて…、

あれ、サニー？」

「おかしいな、さっきはいたのに。」

「おうい、どこ？」

サニーは、みんなの前からとつぜん姿を消した。次の旅先への指令が来たので、サニーとリボンは、この町を旅立ったのだった。

「レオナ、ノア、リリース、ペロ。また、いつか会えたらいいな…。ね、リボン。」

「また、あえるわよ。きつと。ね、サニー。」

サニーとリボンはほほ笑んでいた。

ピコとぼくのつながり

大船渡北小学校五年 浦島 帆乃佳

ぼくの名前はリョウ。五さいだ。大船渡に住んでいる。ぼくの親は外国で仕事をしていて、めったに会えない。だからいつもはおばあちゃんという。それでもさびしい。

ひさしぶりにお父さんとお母さんが帰ってきた。そしてお母さんが言った。

「新しい家族ができたの。」

お父さんがだっこしていたのは、茶色の小さな子犬だ

った。その子犬はぼくの足に体をスリスリしてきた。子犬はすぐにぼくになついて、ぼくはその子犬に「ピコ」と名付けた。

なんでもかって、最初に会ったとき、ピコピコ歩いていたらなんだ。ピコが来たとき本当はびっくりした。けれど今は、家に来てくれてとつてもうれしい。ピコが来たら「さびしい」なんて心のどこにも無かった。逆に「うれしい」って気持ちでいっぱいだった。そしてぼくとピコは、いっしょに大船渡の道を散歩して、いっしょに遊び、いっしょに笑って過ごした。ずっと何年も、何十年もこのまま笑っていたいなと思っていった。けれどその願いは叶わなかった。

その日は、お母さんとお父さんが帰ってきていて、ぼくは朝からうれしかった。そしていつもの毎日がやってきた。ぼくは保育園のバックをかたにかけ、大船渡の坂を上っていった。そしていつもどおり友達と遊んだ。お昼ごはんを食べて少しあった。

「ガタガタッ」

急にゆかがゆれた。

「ガタガタガタガタ」

「なんだったんだろう。」

ぼくは小さな声でつぶやいた。

「ウーウー、大きな地しんがありました。津波がくる

かもしれないのですぐに高台にひなんでしょう。ウーウーウーウー・・」

その音が鳴っている中、みんな走ってにげて行った。ぼくもそれにつられて走った。高台に行ったらすぐに先生たちがぼくたちの人数を数え始めた。その間、ぼくは、フェンスによりかかりながら、町を見ていた。目にうつったのはいつもの大船渡が黒く大きい波にのまれていた。いつも行くスーパーも、友達の家も。そしてぼくは右を見た。

「あつ。」

ぼくが見たのは、ぼくの家が波にのまれていくところ。周りはすごかった。何がって、声がすごかった。

「町が・・町がくずれてしまうー。」

「んだあ、町だけじゃなくておらたちも終わりだあ。」と、おじさんたちがさけんだ。他にも友達が泣きながらさけんだ。

「お母さーん。」

ぼくはそれをずっと悪い夢だと思ってた。その前に夢であってほしかった。だって、いつもどおりの毎日がこんな日になるなんて・。自然になみだが出てきた。そして、

「ピコオー。」

ときけんだ。

それから何時間後、ぼくはお父さんとお母さんに会えた。でもピコが心配でたまらない。それから日がくれ夜になった。ぼくはずっと心の中でさけんだ。「帰ってきてピコ。」てね。

その夜ねてるとき夢を見た。それはピコが空へのぼっていくところ。

「リョウなら大丈夫。」
ていいながら。

あの日から二年がたった。ぼくは七さいになった。小学校に入学した。大船渡の町も、だんだんもどってきた。でも今でもピコは見つかっていない。

「やっぱり津波にのまれちゃったのかなあ」思っちゃいけないと分かっている。けれど、どうしても考えてしまう。

でも最近思うようになったことがある。それは、ピコはぼくにどうなつてほしいか。笑っていてほしいか、泣いていてほしいか。きっとピコは、ぼくがずっと笑ってすごしてほしいと願っていると思う。だって、ピコが悲しんでいるとき、ぼくも悲しくてたまらなくなる。ぼくが笑っているときはピコもうれしそうだった。そう、ぼくとピコは、会えなくても気持ちがつながっているから。相手の気持ちがわかるから――。

その日の夜。ぼくは夢を見た。ピコがぼくに話しか

けてきた。

「リョウ、もうぼくのこととは心配しないで、泣かずに笑って前を向いて歩いて――」

それから、ぼくはピコの出てくる夢を見なくなった。でも、最後のピコの言葉で分かったんだ。ずっと前を向いて笑って生きていれば、ぜったいにいいことがあるって。

「ありがとう、ピコ。」

ぼくはだれにも聞こえない声でそうつぶやいた。

未来に向かって

大船渡北小学校五年 栗村 翔笑

「私の名前は、みらい。中学三年生で、大船渡にすんでいます。」

みらいは、いつも楽しく、幸せにくらしていた。そう、あの日までは……それはとつぜんおこった。二十一年三月十一日大きな地震におそわれた。そのあと津波がきた。

（なにかもが、流されている）

みらいには、なにがおこったかわからなかった。みらいたちは、高台にひなんした。夜は暗いし、とても静

かだった。ひなんしてきた町の人たちは、恐怖のあまり震えていた。みらいもひ災者の一人だ。家も流され、親の居場所も分からないままだ。

つぎの日

（なんでならんでいるのかな？いってみよ）

はりがみかはられていた。でも、それを見た人は、泣いていたり、悲しい顔をうかべていたりしていた。

（なんだろう）

チラッ。みらいは、紙をみた。

（えっ、なにこれ。）

それは、津波のひ害でなくなった人が書かれていた。

（お母さん、お父さん…）

そこには、みらいの親の名前が書かれていた。みらいは、泣いた。悲しくて、さみしくて…

「おねえちゃん。なんで泣いてるの？」

「うん。なんでもないよ。それより、お父さんとお母さんは？」

「いないよ。津波で流されちゃったの」

（そうなんだ。まだ小さいのに親がいなくなっちゃったんだ）

「名前は。」

「ん？名前はね、さえ。さえのえは笑うっていう字なの。お母さんがずっと笑っていてほしいからって、

この名前にしたんだって。」

「さえちゃん。」

「あつ、おばちゃんがよんでる。バイバイ。」

そういつてさえはさっていった。

（考えたこともなかったなあ。自分の名前の意味…わからない。）

みらいはわからないまま室内にもどった。

「みーらーいー。」

みらいの友達のみみだ。

「ねえ、先生からあき部屋のきよかもらったから、相談室ひらかない？」

ときいてきた。

「相談室？」

「そう、相談室。こまっている人のなやみを聞くの。」
でも、みらいは考えこんだ。そして三十分たちやっと口をひらいた。

「うん、やろう。」

それから、みらいとまみの相談室がスタートした。相談にきた人は、話してスッキリしたのか、笑顔で帰っていった。

「おねえちゃん。」

「あつ、さえちゃん。きてくれたんだ。」

「うん。あの、おねえちゃんってミサンガ作れる？」

「うん、作れるよ。」

「じゃあいっしょに作ろう。」

といいながらさえはいきなり泣きだした。

「どうしたの」

「ミサंगा、いつもパパとママといっしょに作ってたから。」

「じゃあ、明日作ろうネ。」

みらいは、まみとミサंगाを作ることにした。

(明日、楽しみだなあ)

みらいは、楽しみでねむれなかった――。

くつぎの日――

(あれ、さえちゃんこないなあ。あつ、さえちゃんと
いっしょにいたおばさんだ)

そうしてみらいはおばさんの所に走っていった。

「あの、すみません。さえちゃんといた、おばさんですよね。」

「あつ、はい。あの、さえがいつてたおねえちゃんて、
あなたのことですか。」

「たぶん……」

おばさんの目からなみだがこぼれた。

「どうしたんですか？」

「さえね、栄養失調でなくなつたの」

「えっ、どうして」

とつぜんの出来事にみらいは、あ然としていた。

「さえがいつてたの。とてもやさしいおねえさんがいたつて。ほんとうにありがとう。」

おばさんは、そういつて行つてしまった。

『みらい、どんなつらいことがあつてもがんばつてね。』
そう聞こえたようなきがした。

みらいは、思った。

(私の名前の意味は、どんなつらいことがあつても、
負けないで、未来に向かってがんばりなさいという意
味だったのかもしれない。)

と、それからみらいはどんなつらいことがあつても、
あの言葉をおもいだして、未来に向つてつきすすんで
いく――。

水中大冒険

綾里小学校五年 熊谷 ほの花

空と優は、女の子。とても仲良しで、いつもいっしょにいる。登校するときも、遊ぶときだつていっしょ。そうそう。言うのを忘れていたけど、わたしたちは、綾里町つて言う所に住んでいる五年生。漁業がさかんで、海の物がたくさん取れる所。ワカメや貝、メカブ

がいっぱい取れる所に住んでいるの。

わたしたちには、夢があつた。それは、海の中をた
んけんすること。わたしたちは、海が大好きなので、
海の中をもぐって、たんけんしたいくらい。まさか、
そのことができる時が来るとは思わなかったけどね。
ある日、わたしたちはひさしぶりに海岸にやって来
た。そこは、「白浜海岸」という所。海岸で遊んでい
ると、うき輪が一つ、海にうかんでいた。わたしたち
は、そのうき輪をさわってみた。すると、うき輪のあ
なの中にすいこまれてしまった。

「わああああ。」

まるで、だれかに引つ張られているかのように、体
がずるずるとあなの中にすいこまれていく。

「ブクブクブク。」

目を開けてみると、そこはまるで海の中。そう、わ
たしたちは海の中にいた。目をつぶって、「なんで、
息ができるんだ。」とか、いろいろ考えてみたが分か
らない。空が辺りを見て上の空でいると、優が声をか
けた。

「ねえ。空——。ここ、どこ。」

二人で起き上がって周りを見ると、魚がたくさんいた。
やっぱり、そこは海の中だった。空と優のかみの毛は、
ゆらゆらとゆれている。

空と優は、周りを歩いてみた。歩いていると、体が
ふわふわしている。ふと、魚に目をやると、魚がしゃ
べっている。よく見ると魚の子ども達が遊んでいるの
だった。二人は、このままじやどうにもならないと思
い、勇気を出して魚の子どもに声をかけた。
「あの。ここはどこ。」
一匹のサンマがふり向いた。

「決まっているだろ。ここは、魚の国だよ。」

二人はおどろいて、近くに落ちていたガラスのかけ
らを拾って、自分たちのすがたを映してみた。二人は
自分たちのすがたを見て、気絶しそうになった。なん
と、二人は魚になっていたのだ。これまた、おどろい
たことにサンマだった。

二人がこれからどうするか話し合っていると、

「宮でんで、子どもが生まれたらしいぞ。」

という話し声が聞こえてきた。二人が、宮でんはどこ
だろうと話していると、

「北の方だ。」

とある魚が教えてくれた。二人は、宮でんへ行くこと
にし、北へ向かって歩き出した。

どんどん、どんどん歩いて行くと、大きな建物が見
えてきた。近くまで行くと、それはまさしく宮でんだ
った。宮でんの周りには、多くのめし使が立っていた。

二人は、宮でんの中に入れてもらおうようにたのんだ。すると、宮でんに入ってよいという許可が出た。さっそく二人は、おそろおそろの中に入って行った。

中に入ってみると、大きな階段があった。二人は、その階段をどんだん上がっていった。階段を上がりきった所に、王女様がすわっていた。王女様は、

「あなたたちはどうしてここに？」

と二人に声をかけた。とてもやさしい声だった。魚の国の王女様は、チョウチョウオオだった。この国は、チョウチョウオオの王様が治めているらしい。

「どうしたのですか？」

もう一度、王女様は二人に声をかけた。けれども、二人はおどろいて声が出せなかった。すると優が、

「わたしたち、道に迷ったんです。」

と答えた。王女様は、二人にたくさん質問してきた。

「どこから来たの。」

「名前は、なに。」

二人は、めんくらって、つばをゴクンと飲み込んだ。ここは、素直に答えた方がいいと思う、やつとのこととで空が、

「ええと。わたしたちは、実は人間なんです。海岸で遊んでいたら、うき輪に引きずりこまれて、気づいたら魚になっていました。」

と答えた。二人は、今までの出来事について全部話した。王女様は、二人の話を聞いて、びっくりしたり、うなずいたりしていた。二人がすべてを話したとき、王女様は、

「そうだったの。」

と、一言言った。その声は、とてもやさしい声だった。

「悪さをしないなら、ここにいてもいいわ。」

二人はとても喜んで、「はい。」と言えずに、うなずいた。ようやく優が、

「何も悪さなどいたしません。こんなわたしたちでもいいんですか。どうぞ、よろしくお願いします。」

と言った。

王女様は、にっこりと笑いながら言った。

「でも、夜はさわがないでね。生まれたばかりの子がいるから。」

王女様は、二人を自分の部屋に連れて行った。かわいいベッドが部屋の真ん中に置いてあった。中をのぞいてみると、赤ちゃんがすやすやと寝ていた。まだとても小さくて、とてもかわいらしかった。

しばらくすると、サンマのめし使いがやってきた。

めし使いは、

「お二人のお部屋にご案内いたします。どうぞ、こちらへ。」

と言った。二人は、めし使いについて歩いて行くと、広い部屋に案内された。そこは、外のながめがとても良い部屋だった。水の光が部屋の中にまで伸びてきて、ゆらゆらとゆれていた。二人は、そのながめをうっとりとしながらがめた。とても居心地が良く、二人は、心から満足した。

食事の時間になると、また、同じめし使いが部屋にやって来た。二人は、めし使いに連れられて長い長いろう下を歩いて行った。まるで「浦島太郎」の竜宮城のような場所に案内された。ここが、食事をする部屋らしい。テーブルに付くと、ものすごくたくさんの食べ物テーブルの上に並べてあった。見たこともない海草がたくさん入っているサラダなどめずらしい料理ばかりだった。

「いただきます。」

二人は、大喜びでごちそうを食べた。二人は、もりもりと食べた。おながが空いていたからだろう。

おながいっぱいになると、二人は、チョウチョウオの王女様の家族と話した。

「どうして、わたしたちは海の中に引きづりこまれたのでしょうか。そのわけをご存じですか。」

チョウチョウオの王女様は言った。

「それは、たぶん海の中に出来るうずのせいかもしれ

ないわ。そのうずがちょうどき輪のあなの真ん中にあたったのよ。」

二人は、顔を見合わせて、うなづいた。

「じゃあ。わたしたちがサンマになってしまったのは、どうしてかしら。」

優が聞いた。

「きつと、この国に来ると、一番最初に目に入った魚と同じすがたになってしまうのよ。きつと。ほっほっほ。」

王女様は、笑いながら言った。二人も、おたがいに顔を見合わせて笑った。なんだかおかしくなったから。食事のあと、二人は外に遊びに行った。でも、魚の子どもたちはどこにもいなかった。しょうがないので、二人は辺りを散歩することにした。海の中から見る夕焼けは、地上の夕焼けと比べものにならないほど美しかった。二人は、しばらく海の中の夕焼けを見つめていた。

二人は宮でんにもどり、ベッドにもぐり込んだ。今起きた出来事をふり返っているうちに、いつの間にか眠りについた。そして、不思議な一日は終わった。二人は、朝早く目覚めた。そして、外に出てみた。辺りはまだ少しく暗かった。すると、二人の耳にだれかの話し声が聞こえて来た。声のする方を見てみる

と、イソギンチャクの夫婦が話しているのが見えた。
「今日は、こちら辺にまたうずができるみたいよ。」
「そうみたいだな。」

イソギンチャクの夫婦はおたがいになんか話を話していた。二人はともにおどろいたが、イソギンチャク夫婦の言うとおり、うずができるのを待つことにした。

しばらくすると、グルグルグルという大きな音が頭の上から聞こえた。二人は、急いで宮でんにもどり、チョウチョウオオの王女様を呼んで来た。王女様は、大きなうずを見てともにおどろいていた。二人は、王女様にお別れを言った。

「今まで本当にありがとうございました。」
と声をそろえて言った。

「こちらこそ。また、遊びに来てね。」

と王女様は言った。すると、二人はうずの真下に立った。うずが二人を包んだ。二人はそつとうずをさわってみた。

「わああああ。」

また、二人はうずの中に引きづりこまれた。また、あの時と同じように。

二人が目を開けてみると、そこはもとの白浜海岸だった。二人は、浜辺の砂の上にあお向けで寝ていた。見上げると、まだきれいな夕日が向こうに見えた。海

の中と同じくらいきれいだった。二人は、急いで家に帰って、今までのことを日記に書いた。でも、これは二人だけの「ひ・み・つ」なのだ。また、行ってみないかと二人は思った。

ありがとう

大船渡北小学校五年 木下 愛友

「いつてきます。」

この手をふる少女の名前は、未来^{みく}。ふつうの小学五年生の女の子。性格は、ぼんやりしててなにかもちゅうとはんぱ。水泳や性格、食よくや顔のためまで。クラスのみんなは、何か一つはとくぎがあるけど、私はない。バレーのスポ少だって私だけ人一倍おこられるし、わすれ物をしたら、すぐろう下にたたさる。そんな、いやなじんせいをおくっていた。

ある日、「市内陸上記録会」のちらしが、学校でくばられた。足が速い人はうかれていたし、おそい人は「陸」の字さえ見ていなかった。私はただただその紙を見つめていた。すると

「未来ちゃん。いっしょにやってみない？」

それは、親友の愛友美ちゃんだ。愛友美ちゃんは、私よりすごく足が速い。でも、愛友美ちゃんは親友だから、

「いいよ。」

と言ってしまった。

次の日。おうぼの紙を先生にだして、ほうかご、練習がはじまった。やっぱり愛友美ちゃんは速い。六年生にも三メートル差をつけて勝った。私は、五メートルも差をつけられて負けた。

そして、その練習を続けること三週間。とうとう選手発表の日がやってきた。やっぱり愛友美ちゃんは選ばれた。その後、どんどん友達の名前がよばれていく。でも私の名前がよばれない。けっきょく私はほけつに入った。それも、愛友美ちゃんのほけつになった。もう私は記録会には出られなくなった。なぜなら、愛友美ちゃんは今まで一回もかぜをひいたことがないくらい、すごくじょうぶな体だし、すりきず一つもつけないことがない。つまり、愛友美ちゃんが、記録会にでないことはないということだ。やっぱり私は運もさいあくだなあと思った。

帰り道、愛友美ちゃんに、
「ごめんね。いやな思いさせちゃって。でも、そのぶ

ん私もがんばって、記録会で優勝するから!!」
と言われた。

「う、うん。がんばってね。」

思いもこもってない返事をかえした。

その夜、私は、愛友美ちゃんが記録会で優勝する夢を見た。でも、いい夢とは言えなかった。

次の日、学校に行くと、愛友美ちゃんのすがたはなかった。朝、学校に行くとちゅうにいきなり自転車がつつこんできて、足にじゅうしゅうをおったという。そしておいしやさんは、

「ドクターストップです。」

と言いました。私も、クラスのみんなも、先生も、みんなぼうぜんとした。そして、いきなりだけど、先生が、

「じゃあ、かわりは未来だな。」

と言った。不安な気持ちでいっぱいだった。

そして、陸上記録会とうじつ。きんちようしながらも、スタートちてんに立った。

「よいドン！」

大きなグラウンドでせいっぱい走った。「愛友美のかわりだけで優勝しないと。」と心の中で思った。ゴールまであと一メートル。「今はなんと一位だ。」と思ったその時、「ズドン」足がすべってころんだ。す

ごくいたかった。でも、がんばって走った。だけど、結果は二位だった。

表彰台に上って大きな手ももらったけど何もうれしくなかった。

「愛友美ちゃんなら優勝できたのに。」

きがえ室でなんとも言った。すると、愛友美ちゃんがきた。

「おめでとう。」

「ごめんね。優勝できなくて。愛友美ちゃんのかわりだから、優勝しようと思ったけど、ダメだった。」

「すごいよ。未来ちゃん！」

「え？」

「だって、不安な気持ちをおさえて、私のためにがんばってくれたじゃん！」

「う、うん。」

「すごいよ。すごいよ。」

そして、愛友美ちゃんが言ってくれた。

「ありがとう。」

私はその一言で心があたたかくなった。そして、何か心の中で、変わった。それは、気持ちだった。ちゅうとはんぱな気持ち、スッキリした気持ちになった。それはすごく気持ちがよかった。

「よし、今日からまたがんばろう！」

今日から、未来のだい二のじんせいが始まる。

奇跡の翼

越喜来小学校六年 平田 涼介

遠い南の島に、一羽の鳥がいました。名前は、バードと言います。バードは鳥なのに、なぜか飛ぶことができないのです。だから、毎日のように他の鳥から、「鳥のくせに飛べないなんて。」

「羽があるのにおかしいな。」

と、からかわれています。

ある日、バードがいつものように地上を歩いていると、ぽつぽつと雨が降ってきました。そのうちに暴風雨となり、バードは、風にあおられて海に飛ばされてしまいました。

どれぐらい日が経ったのでしょうか。

ある日、バードが目覚めると見たことのない陸地に打ち上げられていました。

「ここはどこだ。」

バードは、辺りを見渡しました。そこへ、一羽の鳥が、やってきました。バードは、

「ここはどこですか。」

とその鳥に聞きました。

すると、

「ここは、日本の中の東北、東北の中の岩手県、岩手県の中の大船渡、大船渡の中の越喜来というところでず。」

と、教えてくれました。

バードは、大船渡は聞き覚えがあると思いました。海の幸がたくさんあると何かで聞いていました。バードは、海の幸をめがけて泳げもしないのに、いきなり飛び込んでいきました。

「うわぁ、泳げなかった。」

と、思ったときにはもう遅く、バードは海の底に沈みかけたとき、だれかがバードを海から引き上げました。

「きみ危なかったね。おぼれるところだったよ。」

助けてくれたのは、カワセミでした。バードは、

「ありがとう。助かったよ。」

と言いました。すると、カワセミは、バードにたずねました。

「きみは、どこから来たんだい。見かけない顔だね。」

バードは、

「ぼくは、遠い南の方から来たんだ。」

と言うと、大船渡に來たいきさつをカワセミに話して聞かせました。そして、鳥なのに飛べないこと、毎日

のように他の鳥からからかわれていたことを話しました。カワセミは、バードの話をうなずきながら真剣に聞いてくれました。そして、バードとカワセミはいつのまにか友達になっていました。

次の日も、次の日も、バードとカワセミは会っていろいろな話をたくさんしました。

ある日、カワセミはえさを探しに出かけました。ところが、カワセミはあやまって、大きな木に引っかかってしまいました。自力で飛ぼうとしても、羽が木の枝にからまり、動くことができません。カワセミはとてもあわてました。どうやっても動けないのです。そのうちに、どんどん不安になってきました。周りは、だんだん暗くなり始め、だれもいません。

「バード、助けて。」

カワセミは、今出せる精一杯の声でバードを呼びました。

バードは、かすかに遠くからカワセミの声が聞こえたような気がしました。バードは、耳をすましました。すると、またカワセミのかすかな声が聞こえてきました。バードは、びっくりしました。でも、バードは飛ぶことができません。バードは、外に飛び出すと、声が聞こえてきた方に急いで走りました。走っても走ってもなかなかたどりつきません。しかしバードは一生

けん命走りました。やっこの思いで、カワセミがいるところまで来ました。足はくたくたで、息もとぎれていました。

バードが上を見ると、カワセミが大きな木に引っかかり、動けなくなっていました。

「バード、ごめん羽がからんで、飛べないんだ。助けてくれ、お願いだ。」

と、カワセミは苦しそうに言いました。

カワセミが、引かなかった木は、大王杉というとても大きな木です。昔の雷にも負けず千年以上生き続け、この越喜来を見守ってきた木なのです。

バードは、どうしたらいいのかわかりませんでした。

「助けたいけど、ぼくも飛ぶことができない。でもこのままでは、カワセミは死んでしまうかもしれない。どうすればいいんだ。」

バードは必死に考えました。

「ぼくが、飛ぶことができたら・・・。だれか呼びに行ってくるのでは遅くなる。」

バードは、木を登ってみました。でも、上まで登らないうちにすべって落ちてしまいます。何度やっても落ちてしまいます。

そのときです。ワシがカワセミを目掛けて鋭い爪を出して急降下してきたのです。

「あぶない。」

バードは、大きな声で叫びました。そして、おもいつきりジャンプしました。それと同時に羽をばたばたさせました。すると、ふわっと浮かびあがったのです。

バードは、夢中で羽をさらにばたばたさせました。バードは、ワシがいるところまで飛んでいました。まるで、翼に不思議な力が乗り移ったかのように奇跡が起きました。そして、バードは、ワシを追い払いました。そして、カワセミの羽を木の枝からはずしてあげました。

「バード、ありがとう。きみ飛べたじゃないか。すごいよ。」

カワセミは興奮して言いました。

バードは、信じられないというような声で、

「ぼく飛べたんだね。きみを助けたいと思ったら飛ぶことができたんだ。力がわいてきたんだ。」

と言いました。

「これで一緒に空を飛べるね。」

カワセミは、うれしそうに言いました。

バードは、ふと家族のことを思い出し言いました。

「ぼく家に帰らなきゃ。」

「そうか。きみの家族が待っているね。飛んで帰るね。おめでと。」

カワセミは言いました。

「ありがとう。きみのおかげで飛べるようになった。きみのこと忘れないよ。越喜来も忘れないよ。」

バードは、涙を浮かべながら言いました。

そして、さっきのようにおもいきりジャンプして、羽をばたばたさせると南の空へ向かいはいきましました。高く舞い上がるとうれしそうに空を回りました。

そして、その姿は、小さく空の彼方へ消えていきました。

私、大船渡が好き

末崎小学校六年 佐々木 梓

神奈川県横浜市に住んでいる私、「平田美麗」。すばらしくいい名前。美しくきれいになるようにつけられた。しかし、それとは正反対。ちっちゃくて、ポッチャリ。出歯で、歯ならび悪い。鼻のあなが、ボタンみたいに大きい。男の子みたいなかみの毛だしボサボサ。それに、勉強・運動、大の苦手。特に、算数と徒競走。算数のテストは、ほぼ三十点以下のしかとったことがなくて、いっつも最下位。かくしていたテストが見つ

かると、もうお母さんは、おにのよう。徒競走もビリ。

なんで、こんなに勉強や算数がうまれてきたの？だれがつくったの？…って感じ。(もし私が大統領になったら、「みなさん、勉強・運動というものをなくしましょう。そして、遊んでばかりいましょう」って言うのにな) そんな、絶対ありえないことを、のんきに妄想して、ニヤニヤしていた。そしたら、

「バンッ、美麗、なにニヤニヤしているんだ。今は授業中だぞ。」

(うわっ。ヤバッ。算数もイヤだけど、担当の先生も苦手なんだよねっ。ハアー。私の人生終わった。算数の先生は、ボーッとしていて、授業に参加していない児童のことは、担任の先生にチクるんだよ。そして、宿題二倍にされる。おまけに説教二時間。恐怖の時間が始まる…)そして、あつという間に算数が終わり、説教の時間…。二時間立つて話をされると足が痛くなるよ。そして、説教も終わり、帰りの会。連らくノートに宿題を書いていたら、

「美麗は二倍な。」

と、いう声が…。(ガーン。やっぱり最悪…。)

「おい。チビでポッチャリ系のあいっただけ二倍だつて。ダッセエ。」

男子だ。(ハアー。また?)そう、私はいっつも

からかわれるの。名前と正反対だから。(あゝ転校したいー。) 一つもそう思う。だけど、全然願いは叶わないの。だけど、もう少しで叶う日がくるんだ。

だるーい。暗ーい気持ちで家に向かった。

「ただいまー。」

私が帰っても家はシーンとしている。お父さんは市役所で働いていて、お母さんはパート。だから、五時にならないと帰って来ない。それまでに宿題終わらせておくんだ。三十分あれば終わるよ。めんどうだからテキトーに答えを見ながら書くからね。

「ただいまー。」

もう五時になりお母さんが帰ってきた。とつくに宿題は終わってたから、ポテトチップスと炭酸を飲みながら、よこになってテレビを見ていた。お母さんは「はいそがしいんです」というかのように、バタバタしていた。買ってきた物は冷蔵庫へ。洗濯した衣類は中へ入れてたたむ。次は夕飯作り。ご飯にワカメのみそ汁。サンマに野菜。いかにも「日本人です」っていう感じの夕飯。(私は、カルボナーラとか外国のオシヤレなのが食べたい)と心の中で文句を言う。お母さんは全部終わってソファアークでくつろいでいる。あとお父さんを待つだけ。いつもは八時に帰ってくる。しかし、七時半に、バダバダッと帰ってきた。なぜかというと、

大船渡のおばあちゃんがたおれたんだって。それは大変。夜の新幹線に乗って大船渡に行った。貧血だって。

おばあちゃんは一入暮らしなの。おじいちゃんは十年前になくなった。それから、たおれることが多くなった。そのたびに岩手に向かうの。これもまた、大変。

「岩手に住もうか」って言っているんだけど、「いいよ、大丈夫」って言うから今までそのままにしておいた。だけど今回のことで、お父さんとお母さん無理やりでも岩手に住むって決めたの。美麗はすぐラッキー。もう、チビでポツチャリ系って言われることもない。良かった。あー楽しみになってきた。

一カ月後。平田家、正式に引っこしてきた。ここ、大船渡市に。新しい小学校にもなれた。末崎小学校っていうの。みんなやさしいんだ。友達もたくさんできた。今日は友達の美空ちゃんに、大船渡のことを紹介してもらった。私はまだ海の輝きがきれいって言うことしか知らない。だから、たくさん素敵なお所を紹介してもらった。

まず、海に行った。その日も青い海でキラキラ輝いていたよ。海産物、たっぷり取れた。美空ちゃんのおじいちゃん、海産物取る名人なんだって。だから、ワカメにウニ、アワビにホヤ、食べさせてもらったの。ほっぺたが落ちるくらい美味しかったよ。(こんな所

に居たら、幸せすぎてもっと太るよ。」って思っちゃった。(今度は海鮮丼にして、五はい食べたいな。)って思った。算数のテストで八十点以上とったら、海鮮丼食べさせてもらうっていう条件で、お母さんと約束しよう。

次に、「BRT」っていうバスに乗った。赤いバスで、ご当地キャラクターがかいてあるの。大船渡のキャラクターは「大船トン」っていうの。「トン」だから、顔がぶたになっているんだ。美空ちゃんは、よくこのバスに乗るんだって。クラスの子も、けっこう利用するらしいよ。人気だね。だけど、私は初。すぐくウキウキしちゃった。

その次に、三陸鉄道に乗った。ここに前、「芸能人」がきたんだって。美空ちゃんが言ってた。あっそれでね、すわりごこちが、とってもいいの。景色も見えて、もちろん海も見える。なんだか、とっても落ち着くし、気持ちがいい。それに、また乗りたいって思わせてくれるんだ。

こんなに美空ちゃんに教えてもらっちゃった。三つ全部大船渡の「素敵な所」だよ。今日は、心も体も目も輝きであふれてた。すごいじゅうじつした一日だったんだ。

この大船渡のすばらしいことを教えてもらった日以

来から、毎日大船渡の素敵なところを探してきた。したら、海、バス、三陸鉄道の三つだけじゃないっていうことに気づいた。三つの他に、次の三つも見つけたの。

一つ目は、人がやさしいってこと。一週間くらい前に、ジャリ道で転んで血が出たの。そしたら、通りかかった、女子高生のお姉さんが、ばんそうこうをくれたんだ。「ありがとう」って言ったら、「あたり前のことをしたんだよ。困っている人がいたら、助けてあげなきゃね。」って言ったの。私も、こういうお姉さんになりたいなって思った。それと、「私も小さいころ、お姉さんに助けてもらったんだ。」っても言ってた。やさしいことをすると、それがどんどん受けつがれていって、やさしくて思いやりがある人になるんだなっていうことが分かった。他にも、いろんな人に助けてもらった。だから、この町は、やさしい人が、たくさんいるっていうことに気づいた。

二つ目は、星がとってもきれいってこと。前まで住んでいた神奈川県は、明るくって、そんなに見えなかった。けど大船渡は、とってもきれいに見える。星の観察するのが、毎日の日課。前まで、勉強が大好きで苦手だったのに、特に理科系の星の観察は、大好きなテレビよりも、優先させるようになったんだ。

大船渡の力ってすごいね。

三つ目は、田舎の所。都会は、周りにお店がたくさんあるから、遊ぶっていうと、ゲームしに行ったり、ショッピングしたりっていう感じでしょ。だけど田舎は、周りに遊びに行くためのお店はない。そのかわりに、公園や山がある。そこで、自然とふれあいながら、虫つかまえたり、おにごっこしたりして、本当の遊びを楽しむことができる。そういう生活をしていたら、美麗は運動がきらいじゃなくなってきた、苦手でもなくなった。運動が楽しくて仕方がなくなってしまうたの。

私、分かったの。勉強や運動、きらいだし苦手って思ってた。だけど本当は、やらなかっただけなんだって。今では、答えを見ながらの宿題なんてしていない。一時間以上かけて、ていねいにやるようになった。運動だって、もうきらい、苦手なんかじゃない。汗かきたいってすぐ思うもん。そのおかげで、勉強も運動も、上達した。これって、全部大船渡のおかげだって思う。こういうような自然とふれあいながら遊べる所がある豊かな町に住めて、とっても幸せ。

コンプレックスだったところもどんどん変化してきた。運動して、つかれてかえってくれば、早く寝れて背が高くなったから、今では身長百五十センチメートル

ル以上。体を動かすから、細くもなった。出歯な所と歯並びが悪い所は、きょうせいして、きれいになった。鼻は、背が高くなつて、大人っぽくなったから、えだ豆みたいに大きな鼻は、目立たなくなつたよ。小さいときに大人ほどの鼻の大きさだったただけ。かみの毛は、のばして、かわいいショートカット。友達に「似合ってる。」とか「かわいくなった。」って言われることが多くなった。とってもうれしい。

私、こういうふうに、ほめられることが多くなつてきて、毎日がすつごく楽しい。楽しい生活をしていると時々（生まれたのも、大船渡で小さいころからずっと大船渡で育つて住んでた）って思うの。こう思うと、どれだけ大船渡のことが好きか、どれくらい大切かっていうのが分かる。私はたぶん、大船渡のことがすつごい好きで、すつごい大切なんだと思う。けっこう前から住んでて、今も住んでる。これから一生住む。けっこうしても、おむこさんもうし、子供が遠くに行つても、ぜったいについていけない。

私、すばらしいことが数えきれないほどたくさんある大船渡に恋してる。全部が好き。一生、はなれない。なぜなら、

大船渡が好きだから !!

笑顔へのかけ橋

越喜来小学校六年 大上 萌衣

私、「畑山 実空」は小学六年生。私が住んでいる地域「横浜」には、海や山、川など自然がいっぱいある。今この横浜は、あの地震の復旧作業が行われている。大人は、元の横浜のように元気な地域にしようがんばっている。

私には仲がよい友達が三人いる。名前は、「夏希」「留美」「理亜」という。私たち四人は、あるダンススクールに六年間通っている。四人ともダンスが大好きだ。私たちはある決心をした。それは、横浜でダンス発表会を開くことだ。

あれは、私たちが小学校三年生のとき、学校で勉強をしていると、突然、学校全体が強くゆれだした。ゆれが少し弱くなり、私たちは校庭へ避難し、はじめの方でしゃがんで、シートや毛布をかぶり、地震がおさまるのを待っていた。

すると、しばらくして、

「津波だ。」

と、だれかが叫んだ。私たちは立ち上がって海の方を見ようとしたが止められた。私たちは、みんなで抱き

合っていた。それから、私たちは家の人が迎えに来て、それぞれ家に帰った。

小学六年生になったとき、私は、三人に話をした。

「私たちも何か、地域のためにできることをしよう。」

「何か力になりたい。」

三人とも賛成してくれた。私たちは、いろいろ考えた。そして、私たちが大好きなダンスの発表会をすることに決めたのだ。

それから私たちは、発表会の準備に取りかかった。

放課後は、チラシ作りや衣装作り。全て、自分たちでがんばった。一番の問題は、会場だった。

「どこかい場所ないかなあ。」

「思い出の場所がいいね。そうだ。」

と留美が言うと、

「横浜小学校がいいんじゃない。」

と夏希が言った。

「そうだね。」

全員一致で、横浜小学校に決まった。

私たちは、とても充実していた。当日のことを考えるだけでわくわくしていた。でも、少し心配もあった。

「たくさん見に来てくれるかな。」

「もし、来てくれなかったらどうしよう。」

そんな話をしながら、私たちは準備を進めた。

「やったあ。ついにできたあ。」

ダンス発表会の準備ができあがった。衣装も会場もばっちり。チラシも配り終わった。あとは、九月十一日の当日を迎えるだけだ。私たちは、ハイタッチして喜び合った。

ついに、本番の日が来た。

朝から、私は、どきどきが止まらない。夕べもちょっとしか眠れなかった。

会場に着くと、もう三人とも来ていた。夏希は、少し目が赤かった。留美は、会場をそわそわ行ったり来たりしている。理亜は、手におまじないを書いて飲み込んでいる。

「やっぱりみんな、私と同じだ。」

と、思った。

私は、みんなに声をかけた。

「さあ、いよいよだね。がんばろう。」

円じんを組み、ハイタッチして気合を入れた。四人でハイタッチするとすっと落ち着いてきた。がんばれそうだと自信がわいてきた。

ダンス発表会開始一時間前。会場に地域の方たちが集まってきた。

いよいよ発表会が始まった。私たちは、元氣よく笑顔でステージに上がった。音楽がなり、私たちは夢中

で踊った。手拍子が起こり地域の方も楽しんでくれている。三曲を踊り終わると、大きな拍手が会場に広がった。

発表会が終わり、お客さんを見送っていると、

「ありがとう。楽しかったよ。」

と、大勢の人から声をかけられた。私は、とてもうれしかった。みんなが笑顔になった。私たちは、地域のために一ついいことができたかなと思った。

私たちは、またダンス発表会を開きたいと思っている。みんなの笑顔がまた見たいと思っているから…。

世界一の友情

末崎小学校六年 大和田 真緒

ガタガタガタツ、と音をたてて、赤い自動車が野道を走る。窓から見える美しい景色がとてもきれいだ。目の前のキラキラと輝く海はまるで宝石のよう。自分の顔が気持ち悪いほど笑顔になる。

「光、何笑ってるの？もう少しで着くわ。」

そう言うってお母さんは助手席で笑う。

ほしぞらひかり

私の名前は「星空光」十二歳の女の子。北海道出

身で、ここ岩手県大船渡市に引っ越し中。私はお母さんとお父さんと私の三人家族。親は二人とも学校の教師だ。みんなは知らないと思うが、実はこうやって引越すのは五回目。前の学校も二年で転校してきちゃった。すぐ転校だから一度も本当の友達をつくれなかった。がないんだ。まあ、仕方がないんだけど。だから本当の友達をつくるのが私の夢。今度行く学校でつくりたいなと思っている。そんなことを思っているうちに、自分達の新しい家と思われる所についたようだ。

「やっとなついたね。もう待ちくたびれたあ。」

目をつぶり、ふうーっと深呼吸をする。目をあけて辺りを見回す。すると、思わず「あっ。」と声を上げてしまった。なぜなら視線の先には車から見えたあの海が目の前にあったから。

「うわあ、すっごいきれい。」

誰よりも海が大好きな私はしばらく見とれていた。とにかくなによりも大好きな海を見ているだけで幸せな気分だった。十分に海を見たところで、もう先に家の中に入っていつてしまったお父さんとお母さんを追いかけて家に入る。

「光、また海見てたの？ほらボーっとしてないで手伝ってちょうだい。」

そう言う私の前にどんどん荷物を置いていく。

「あー、分かったから。仕方ないなあ。」

私は洪洪と荷物を持つ。お父さんなんか仕事みたいにあわてるもんだからおかしくてしょうがない。

「光、自分の部屋どこにするー？」

突然そんな事を言われて驚きの表情を隠せなかった。それもそのはず。だって前の家では自分の部屋なんて無かったから。もう六年生になる私は自分の部屋が欲しいと心のどこかで思っていた。けどまさか本当に自分の部屋をつくれるなんて思ってもいなかった。

「光ー、どーしたの？」

はっと我に返る。

「いや、何でもないよ。とても嬉しいよ。」

そう言って一番端の部屋を指差して、

「ここがいい。ねえいいでしょ。」

と聞いてみた。すると、

「いいわよ。そのかわり自分自身で片づけるのよ。」

と少しきつい言葉が返ってきた。

「いいもん。もう六年生だし。そのくらいできるよ。」

何か私は意地を張り、自分の部屋に入った。あれこれ片づけているうちに、ふと時計を見るともう夕方だった。だから、夕食をすませてまた自分の部屋に戻ってきた。明日から学校だ。私は転校生として新学期はスタートだ。まあ、いつも通りだけど。正直不安だ。勉

強のこと、先生のこと、クラスのこと、友達のこと……。ただど行ってみなければ分からない。だから明日がとも楽しみだ。「今日は眠れなさそうだな。」そう思い、あたたかい布団にもぐりこんだ。

次の日。カーテンのすき間から光がさしこむ。私はゆっくりと目を開けた。

「おはよー。光、起きてる？」

お母さんが入ってきた。ゆっくりと体を起こす。時計を見ると七時三十分……

「えー！七時三十分！」

私は飛び起きて急いでしたくをした。「もお、初日からこんなになるなんて。」朝ご飯を軽くすませ、あいさつもせずに外へ出た。手に持っていたランドセルを背負い、海を一目見て思いっきり走った。校門と見られる門があり、そこには「末崎小学校」と書いてあった。

「って、こんなところで立ちつくしてる場合じゃない！」私は桜が満開に咲いている道を通りぬけ、ギリギリで校舎に入った。「何とか間に合ったみたい。」私はそのまま校長室と思われる部屋に入った。方向音痴な私は迷わずにここまで来られたことが何とも不思議で仕方がない。

「失礼します。今日からこの学校でお世話になる、星

空光です。」

校長室は苦手で入った時は心臓が飛び出そうなくらい緊張した。今も胸がドキドキしている。すると、

「ああ、光さん。待っていましたよ。」

と声がして、背の高くて若々しい男性の校長先生と思われる人が入ってきた。

「あの、星空光です。よろしくお願いします。」

「よろしくね。さっそく六年生の教室に行こうか。」

校長先生に招かれて私はとぼとぼと歩いた。

「さあ、ここだよ。光さん。みんなが待っているからね。」

そう言われて、ガラガラツと扉が開いた。そして、教室の中に入った。

「転校してきた星空光です。これからよろしくお願いします。」

自分が出せる精一杯の声でみんなにあいさつをした。すると、一斉に拍手が起こったのだ。私は驚いてきょとんとしていた。

「はい。光さんの席は窓側ですから席についてください。」

担任の先生が教えてくれたが、緊張で足がガクガク震えて思うように前へ進めない。やつのことで自分の席につくといきなり声をかけられた。

「光ちゃん、私は空井翼。そらいつばさ よろしくね。」

そこには、太陽のような笑顔で話している女の子の姿があった。キラキラとした可愛いその子について見とれてしまった。

「うん。よろしく。」

私も笑顔で返した。それから始業式が始まった。何も分らない私にクラスのみんなが優しく接してくれた。始業式が終わり、今日はもう下校の時間だ。学校が終わるのが早い気がする。

「光ちゃん、一緒に帰ろー。」

翼ちゃんが声をかけてくれた。

「うん、いいよー。」

私はあまりに嬉しすぎて笑ってしまう顔を隠しきれなかった。そして、私は翼ちゃんと二人で仲良く帰った。私の家が見えてきて、

「もうここでもいいよ。今日はどうもありがと。」

「どういたしまして。これからは友達として何でも聞いて。」

私は嬉しすぎて涙が出そうになった。それくらい嬉しかった。そして私は家に入った。

「ただいまー。」

私は、笑顔でお母さんとお父さんの所に行く。

「おかえり。楽しかった？」

「うん。友達もできたんだよ！本当に嬉しい。」

「それは良かったね。もう夜ご飯にするよ。」

いそいで自分の部屋にランドセルを置いてみんなと夕食を食べる。そしていつもより早く布団に入り眠りについた。

朝。私は学校に行くのが楽しみでちよつぱり早起きをした。そして、朝ご飯を十分に食べ、いつもより早く家を出た。その理由は、翼ちゃんと一緒に登校するからだ。たった一日しかたつてないのにもうすっかり馴染んでいる。

「おはよー翼ちゃん。」

翼ちゃんが来て歩き始める。学校に着くと、おしゃべりをしたりして二人でずっと一緒にいる。授業が始まると、二人で相談したりして、授業中も一緒。そしてまた一緒に帰る。そんな、何もない、ただ普通の毎日を私は送っている。運動会などの大きな行事でもいつも隣にいるのは翼ちゃん。写真と一緒に写るのは家族か翼ちゃんだ。こんな毎日が幸せ、だったのに…。

私の学校生活もう少しで終わろうとしているある日、私はお父さんに呼び出された。どうやら話があるようだ。

「光、最後まで聞いてよ。大切な話だから。」

そう言って話し始めた。

「実は、申し訳ないんだが、また転校することになった…。」

その言葉を聞いて私は、

「嘘でしょ。ねえ、嘘なんでしょ。」

黙って下をむいているお父さんを見て私はガッカリした。

「お父さんなんか、もう知らない！」

と言って、家を飛び出した。行き先も分からず、ただ走った。そして泣いた。私の大好きな海を見て泣いた。

せっかく友達ができたのに…。一番欲しかったものをやっと手に入れたのに…。私の心はどんどん崩れていった。もう家族なんて知らない、そう思ったとき、

「光ちゃん、何で泣いてるの？」

上を見ると翼ちゃんが心配そうにこちらを見ている。悲しい気持ちが込み上げてきて、思わず翼ちゃんに抱きついた。そして全てを話した。

「大丈夫だよ、私は。だって私達、友達でしょ？離れ離れになってもずっと友達じゃん。」翼ちゃんの言葉に感動してまた涙が出てくる。

「光ちゃん、大丈夫。私はいつでも待ってるし、会いに行くから。絶対に。」

私の心が温かい何かに包まれたような気がする。

そしてついに別れの日。翼ちゃんはあるキラキラの笑顔で見送ってくれた。その笑顔、いつまでも忘れないよ…。

数年後、末崎町を離れてからの生活に慣れてきた頃。家のチャイムが鳴った。そっとドアを開けると、そこには、太陽みたいなキラキラの笑顔の翼ちゃんがいた。二人でクスツと笑い、抱きしめ合った。やっぱり二人の友情は世界一だねっ。

想い

猪川小学校六年 渡辺 響

それは今からもう六十年も前の話。それは突然やってきたのさ。地面からしんどうがきたと思ったら急にゆれだした。その時、わたしは十歳だった。怖くて怖くてたまらなかった。

僕は斉藤翔、十歳。今は祖父の話を聞いている。僕の祖父はあの大震災の体験者なんだ。それで僕は夏休みの自由研究にこの体験談を書こうと思ってる。あと図書館とかで大震災のビデオも探すんだ。そうすればきっと自由研究は成功する。

「よし、頑張るぞ!!」

明日は図書館で一日過ごそう、涼しいしね。よしつ、じゃあ今日は寝よう。

りり、りりりりり、りり、りりりりり、自分で設定したのにうるさい目覚まし時計。

「いってきまーす。」

「ホイ、ホイ。」

祖父の気の無い返事を聞きながら図書館へ。

ビデオコーナーを歩きながら大震災の正式名を思いだす。えっと、東…、東日本地震？あれ…。そうだ、東日本大震災だ。は行のたなの方向へ行く。あった、三つもあるよ。ラッキー。ここの図書館ではその場でビデオが見られるんだ。再生。

「津波がきます。海からすぐにはなれなさい。海からすぐにはなれなさい。ウー…、ウー…」

とてつもないサイレンの音が、僕の耳の中でこだましている。次のビデオを再生。「ゴォー。グシャツバリバリ。ピキピキ。ゴォー、ゴォー。」

この映像は海沿いのビルの三階にあった、防犯カメラの映像。高い位置にあったためカメラは無事だったが、ビルは半かいしたそう。三つ目のビデオを再生。

「昨日の地震から一夜明けましたが、まだ人々は余震による津波の恐怖におそわれています。」

僕は、怖かった。もうビデオが見られなくなるほど。

メモはたくさん取ったしもう帰ろう。もういやだ。

次の日の朝、僕は自由研究に取りかかった。祖父の話からビデオのことまで…。その結果とても上手くできた。でも始業式の前日までそれが開かれることはなかった。さけていたのだ。ビデオの恐怖がよみがえるのを。そして学校に持つてくかなやんでいると祖父が言った。

「大震災の、話をするのはワシもイヤだ。だが体験者にはそれを伝える使命がある。ワシは、それを守った。」

次の日、祖父は急に亡くなった。僕にあの言葉を残して。僕も祖父の様に強い人間になりたい。そのために、僕は伝える。

この『想い』を。

大震災

末崎小学校六年 小川 楽人

二〇一一年、東日本大震災が起きた。ちょうどローマ字の学習をしていた時だった気がする。いきなり遊園地のこわいアトラクションみたいな揺れが来た。

ぼくたちは、

「おっとっと。ころびそう、あはははは。」

と言った。なんとか物は落ちずに地震がやんだ。ちようど先生たちに、

「もし火事がでたら、この経路で逃げますよ。」

と、教わっていた。まだ男子はくすくす楽しそうに行動している。だけど、六年生くらいの人が海に指を差した。ぼくたちはそこを見てみると家が海でうまっていた。その時、母さんや妹が生きているか不安だった。それにもしかしたら、自分達のいる学校も、飲み込まれるかもしれない。女子は、泣いている人もいた。それをなぐさめてくれている男の子もいた。「なくなつて。なくなよ。」

と、言っていた。先生は、

「やばいな。」

と言っている人もいれば、気まずそうな先生もいた。

体育館に行き、布団をかけた。

「本当に大丈夫なのだろうか。」

と、小声で言っていた。すると六年生が、

「ほら、楽しい話をしようよ。」

と、言ってくれた。ぼくは少し気は楽になったが母と妹はまだ来ない。あつというまに時間がすぎた。だけどやつとお母さんが迎えに来た。「やつと来た。」とほつとした。でもお母さんの手はとっても冷たかった。それから近くにある施設に泊まった。周りを見れば、

知らない人ばかりだった。あとで知らない人といっしょに寝た。なんとか一週間くらいで電気がきた。でも春休みの宿題があった。

「これはけっこうきついなあー。疲れるだろうな。」

と、言いながらなんとか勉強を終わらせといた。

それから何週間も過ぎて春休みもののびたから、六年生たちはよろこび、ぼくは、海がこわかった。

「もしかしたら友だちとかも死んでいるかもしれない。」と、考えたこともある。だけど学校は流されていなかった。

そうしながら学校に行つて六年生が卒業をして、四年生になった。ごはんは白いご飯しかなかった。だからといって全てがいやではなかった。実は近くにもう一つの施設があった。だれかほかにいるのではないかどうかわからなかったけど行ってみた。したら同級生など学校の仲間がいっぱいた。ぼくも知らない人ともだんだん仲良くなつてとっても楽しくなった。そして、ついに仮設も建った。校庭に仮設も建った。学校には、変わったことがいっぱいあった。校庭はなくなつてしまったけど、トランプが使える「プレイルーム」があった。しかも近くにある教育の森が使えるようになった。ブランコができる木があったりターザンができるような物もあった。そして支援物資が届いた。

最初はリュックが学校に来た。でもその中を見て、
「もうこんなガラクタはいらないよ。」

と言った。

「こんなただのくずだ。」

とも言った。家に帰ってどこかの引き出しにつっこんだ。五本のえんぴつとノート三冊もらったらしい。なかった。でもえんぴつ五十本とノート四十冊もらった。あまりうれしくない。だから、

「いっぱいありすぎだよ。」

と言った。

ぼくの家には、母と妹がいる。母は、少しだけ遠いところで働いている。毎日八時くらいに帰ってくる。いつも

「すごく疲れた。」

と、アニメのきめゼリフみたいに言ってくる。だから妹は、いつもくたびれていた。たとえば、

「足いたい。」

と、言っとうつぶせになる。ぼくは最初は「何をしたいんだ？」と、思った。でも妹は、すぐにマッサージをする。だから「つかれていそう。」と思った。でも妹は、元気にやっている。かといって妹は最近悪口を言ってくる。母もなにかとがんばってる。みんなに五十冊あったノートをあげたりしていた。

ぼくは、テレビが大好きだ。だからといってニュースが大好きではない。アニメのほうが好きだ。ちびまる子ちゃんかサザエさんなどを見てたりする。元気になるからだ。

「すごくおもしろいなー。」

と思う。ぼくと妹は、一緒に見ている。妹は、最近いところに自転車をもらってそこへんをはしっている。

ぼくは震災前は、自転車はあった。だけど震災で近くの川に頭から落ちてしまった。

「なんで震災でここに落ちるんだよ。」

と、ずっと言ってた。ぼくは、マラソン大会があった。でも、

「ビリから二番目以内なら自転車を買ってあげる。」

と、足がおそいぼくに言った。マラソン大会でぜんりよくではしった。そしてなんとかビリから五番目くらいにはいった。ぼくは、

「よっしゃー。」

と、言った。そして自転車を買ってもらったきちようなものが、震災で川に落ちてしまった。なんとかみんなで自転車をひいたが、なおせなかった。だから、妹を見ていて、

「自転車ほしいなー。」

と、言っていた。

なんと学校に本当のカメラマンがくるらしい。

ぼくは、

「一度はテレビに映りたいな。」

と、思ったことは、いっぱいある。ぼくは、はりきって録画をした。もしかしたら、なんかのエラーで録画できないかもしれないのでじゅうぶんにしらべた。カメラマンがきた理由は、南極に行った人が学校に来て南極の氷を見たり触ったりした。ぼくは南極の氷について、いっぱい質問した。ぼくは、

「録画されてるかな。」

と言っていた。

「まだ出ないな、まだ出ないな。」

と、言っていた。そしてついに、ぼくが出た。

「教室が南極に？今日、南極クラスが行われました。」

そして、そのあとぼくの顔が出た。ぼくは、念願の願いが本当になかった。

テレビの録画を見ている時、テレビに

「夢と希望をあげるため」

と、聞こえた。以前にもテレビを見ている時にもこんな言葉を言っていた。ぼくは、分かった。ぼくたちを元気にさせるためこんなことをやっていたんだとわかった。最初のリユックを、
「こんなガラクタはいらない。」

と、言っていたけど、本当は元気にさせたくてやってくれたと気づいた。ぼくは、

「なんで『こんな物なんていない』と言ったんだらう。」

と思った。

今日、学校にいくとさつまいもが来た。きつとぼくたちに夢と希望を与えるためだったんだらう。

大船渡のいいところ！

末崎小学校六年 白井 夕菜

「望、ほらもうすぐだよー」

「大船渡ってほんと田舎ねえ」

パパとママの話し声が聞こえる。

「プロオオオン」

車が坂道を登る。大船渡湾が見えてきた。望は、前の小学校で最後に撮影した友達と笑顔でピースしている写真をつまらなそうにながめた。

「海のニオイ、キライだもん」

窓の外を見ながらつぶやく。色あせた店々の看板が続いている。

「そんなこと言わないの。あれは、磯の香りなのよ。」
ママが笑いながら窓を開けた。やっぱり、あの香りがする。

「もおー、窓しめてよっ」

勢いよく立ち上がったせいで、望は車の天井にゴンツと頭をぶつけてしまった。

「つてえー……」

頭を抱えながらゆっくりと座る。窓から入ってきた風で、さっきの写真がふわりと飛ぶ。

「ああつ、待って！」

にぎりしめたせいで、写真はクシヤクシヤになってしまった。イライラしてきて、写真をパーカーのポケットに押しこむ。

「もう、しつかりしなさい。いろいろやることもあるんだから。」

ママの声。窓の外に緑の木々が見える。望は、大きなため息をついた。

「あらー？おかしいわねー。家はここらへんのはずなのに……」

「もしかして迷ったー？」

ママと妹の綾がマップをのぞきこんでいる。

「もう外は真っ暗なのに……。どうする？」

「しようがない。今日はどこかに泊まろう。」

望は、髪を結び直した。耳より少し高い位置のポニーテールだ。綾は、カラフルなシュシュで結んだおだんご。二人とも、この髪型は気に入っている。

『海風ホテル』という看板が道路脇に立っている。しばらく進むと、『海風ホテル』が見えてきた。三階建ての洋館風の建物は、白い壁で、あまり汚れはないようだ。

予約をしなくても宿泊できるホテルで、中に入ると、フロントのすぐ横に、色とりどりの椿の絵がかざられてあった。

夕食は、ホテルの中のレストランに行くことになった。空田家の他には誰も客はいない。望は、無駄に広いレストランの中をきよきよと見回していた。その間にも、キッチンからは、たくさんの料理が運ばれてくる。

望は、その中の一つの料理に目がいった。どんぶりにご飯とみずみずしいイクラやホタテが盛られ、その上にカツオ、あじ、さんま、いかなどの切り身とねぎと海苔が色どりよくのっていた。望は、夢中になって食べた。そしてペロリと飲みこんでしまった。

「なんておいしいんだろう。生まれて初めて、こんな物を食べた……！」

おどろきとうれしきで胸がドキドキする。

その夜、望は部屋でマップを見て、あの海鮮丼は末崎産ということが分かった。そして、明日、末崎に行けたらいいなあと考えた。

朝、空田家の四人は、住むことになっていた家を探しに、末崎町へ行った。末崎町は緑の山や森がたくさんあって、自然にめぐまれている。海の香りもしなく、望は窓を全開にして、外の景色をながめた。朱や紺のかわら屋根の家では、人々が植物に水をやりたり犬と遊んだりしている。

「ねえねえ家はどこ？」

「んー…確か白い壁で黒い屋根だったの…。あつ、あそこじゃない？」

ママが指差したのは、少し下の方の道路脇に建っているそう古くない家だ。

「本当だ…！このまま真っ直ぐに行けば、あそこの道路に出るぞ。」

望は、そんな三人の会話より、末崎の風景に見とれていた。車が急発進して、すごいスピードでツタのからまる小道を走り抜けた。赤や白の椿が咲いている木が連なる砂利の坂道に車は出たが、さっきの家は見当たらない。後ろを見ると、おしゃれな家や店が続く細道があった。車はバックしてその道へ入っていった。左右どちらを見ても、年代を感じる旅館、広々としたラベンダー畑、ヒマワリが咲きみだれる空き地など、望をワクワクさせるようなものがいっぱいある。

「また迷っちゃったかな…。」

「えー？やめてよ、もう！」

パパとママが道を確認している。すると、綾が

「え、あれじゃない？白い壁で黒い屋根！」

とさけんだ。目線の先は、ほど遠くない家が並んでいる下り道の途中だった。

「…あれかもしれないわ。」

というママの声と同時にパパはアクセルを踏んだ。

「プロオオオーンッ」

ママは、かん高い声で車を降りた。

「ここだわ！そう、ここよ！」

それに続いて、望と綾が家の庭に降り立った。玄関のポーチにはタイルがしかれた芝生の庭。そんなに土地の面積はせまくないようだ。二階建ての白い壁に、広いベランダ。黒く光る屋根。家族四人が待ちわびた一軒家だ。四人で中にかきこむ。

長い廊下の横には、フローリングのリビングや、キッチン、ダイニングテーブルなどがある部屋がたくさんあった。二階には、今までなかった望と綾の部屋もある。二人は飛び上がって喜んだ。望は、

「大船渡って、けっこういいかも…。」

とひそかに思い始めていた。

庭へ出ると、パパとママがとなりの家の人にあいさつをしていた。とても明るく、優しいような雰囲気の方

だ。その人は、望と綾を見ると、目を細めながら、
「まあ、めんごい子供たちですねぇ。」

と言った。望には訳が分からなかった。とっさに、

「めんこいってなんですか？」

と言う言葉が出ていた。その人は、親切にこう教えてくれた。

「ああ。めんこいっていうのは、かわいいって意味なの。こちらへんの方言みたいなので、うちの娘もめんごいのよー。」

その人は、三十八才くらいの若くてキレイな奥さんだったけれど方言を使っていた。望は、方言というのはおじいさんやおばあさんの世代の人達が使う言葉だと思っていたが、幅広い人達が使えるということにおどろいた。その時、となりの家から望と綾と同じくらいの年の姉妹が走ってきた。

「こんにちは。私達は片山萌香と莉香。これから一緒に遊ぼうよ！よろしくね。あと、この地区はカモメが通ったり、遊びにきたりするの。『かもめの玉子』を今、冷蔵庫から取ってくるね。待ってて。」

そう言って二人は家へ戻っていった。望は、『かもめの玉子』というお菓子は、CMなどで知っていたが、カモメが通るといふことはよく分からなくて、不思議に思っていた。と、その時。カモメの大群が屋根の上

を海方向に通っていったのだ。綾が、目がくらんでフラフラとしている。望は、目を丸くして、しばらくぼうっと立っていたが、これが「カモメが通る」ということなのだと分かった。その後、四人は青空の下、冷した「かもめの玉子」をたっぷり食べ、お腹をこわしていた。

その夜、望は、自分の部屋の机に向かって今日から書き始めた、萌香、莉香、望、綾の四人の交換ノートを書いていった。

『八月一日 晴れ』まで書いて、望は、一瞬何を書こうか迷った。だが、すぐにえんぴつをにぎりしめ書き始めた。

『私、大船渡が大好きだよ！』という一言を見て、うなずいてからベッドに入った。大切な大切な四人の交換ノートを枕元に置いてから、望はぐっすり寝た。

次の日の朝。望と綾は大船渡の家ではじめての朝をむかえた。二人とも、とてもすがすがしい気分で、パジャマのままはだしで外に出て、海をながめていた。

「なんてキレイな海…。」

「またカモメ、通るかなあ？」

「もちろんだよ！」

そこに、萌香のお母さんが来た。

「おはよう。望ちゃん、綾ちゃん。このワカメ、食べ

ない？うちのお父さんが漁でたっぷり取ってきたからお母さんに料理してもらって。」

「わー、ありがとうございます。」

「あら、片山さん！すいませーんっ。」

「あつ。空田さん、ワカメですー！少しですけどどうぞ！」

「まあー、本当、ありがとうございます！」

さっそく、ママはワカメをゆでて料理している。すると、新聞を読んでいたパパが、

「そういえば、末崎のワカメは有名なんだぞー。望、綾、知ってたか？」

と聞いてきた。二人は首を横にふる。

『末崎わかめ』は、風味が強くて厚みがあり、ツルツとした食感のおいしいワカメなんだよ。成長途中のやわらかいワカメは『早採りわかめ』と呼ばれ、しゃぶしゃぶにするのが一番美味しいって地元では評判なんだってさ。髪を丈夫にすることもあるぞ。」

「じゃあ、髪の毛が増えるんだったら、パパには、薄毛対策でいいかもねーっ！」

「綾ー！一言多いぞーっ！」

「アハハハハハ…」

最初は、どんなところか分からなくてすごく不安だったけれど、末崎に引っこしてきて本当に良かった…！

今度は、大船渡のいいところをもっとすこしずつ見つけていこう…。

《中学生部門》

ウミネコと大船渡

大船渡第一中学校一年 大和田 彩水

ザザアザザア。

波の音を聞きながら、一羽のウミネコは海を渡っていました。

「ああ、大船渡まで、あとのくらいかなあ。」

ウミネコは、そうつぶやくと、休けいに、海へと降り立ちました。

「よ、お前さん。お前さんは、どこへ行くんだい？」すると隣に、白鳥がやってきました。

「僕は、大船渡までだよ。」

「そうか、いっしょだね。僕達の群れと、行かないかい？」

そうして、ウミネコと白鳥達は、一緒にいくことにしました。

それから三日、白鳥の群れとウミネコは、大船渡につきました。しかし、そこにあつたはずの建物は消え、緑色だった木は赤くなり、大船渡のカモメとウミネコ達は、悲しそうに下を向いていました。

ウミネコと白鳥が知らない間に、地震が起きて、津波が押し寄せてきたというのです。

その夜、ウミネコは、自分を責めながら、暗やみに光る月を見ていました。白鳥、大船渡のカモメ、ウミネコ達は、余震のたびに、ピクツと起きては寝るを繰り返して、安眠できている様子ではありませんでした。

「なぜ、君は起きている？ 悩みでもあるのかい？」

ウミネコは、むつとしました。震災の直後、悩みをもたない者が、いるはずがないと思ったからです。ウミネコは、辺りを見回して、声の正体を探しましたが、暗くてよく見えませんでした。ウミネコが、

「では、君は、悩み事がないとも言うのかい？」

と、たずねると、

「なくはないが、僕の悩みは、悩んで解決できるものじゃないからね、だから僕は、ひたすら歌うのさ。そうすれば、きつと、立ち直る事が出来るから。」

そう言うのと、声の主は歌いだしました。明るく、元気の出てきそうな歌を歌う声は、どことなく悲しそうにも聞こえました。

朝になると、ウミネコは大船渡のカモメとウミネコ達を白鳥にまかせ、昨晚の声の主を探しに行きました。

次の日も、次の日も、探しに行きました。

すると、一つのうわさが、耳に入りました。それは、一匹のカエルが、夜な夜な歌を歌っているというものでした。ウミネコは、そのカエルに会うことにしました。

一方、白鳥には、新たな悩みがありました。それは、白鳥のわたりの日が近づいてきていることです。白鳥は、北へ帰らなければなりません。しかし、震災にあつたばかりの大船渡と、ウミネコをおいて、北に帰る事は、白鳥にとって、心がいたむ事でした。そして、その事を、ウミネコに言いだせないでいました。白鳥達は空を飛び、エサを探しました。もう大船渡のカモメ、ウミネコ達には、エサを探す気力すらありませんでした。

声の主を探し始めて六日、雨が降る夕方にウミネコは歌うカエルを見つけました。カエルは、

「なぜ、君は起きている？ 悩みでもあるのかい、と、僕が君に言ったんだ。」

「君だね、あの時の声の主は。君に頼みたい事があるんだ。」

ウミネコがそう言うのと、カエルは、

「悩みの次は頼みかい？君はいそがしい鳥だね。少しは羽を休めたらどうだい。」

と言ひ、笑いました。ウミネコはむつとして、帰ろうかと考えましたが、これではカエルを探した意味がないと、いらつきをおさえて、言いました。

「ああ、そうだね。でも僕には休む時間がないんだ。カエル君、僕の頼みをきいてくれないかな。」

ウミネコは、カエルに歌作りを、頼みました。

次の日は、とてもよい天気で、ウミネコは朝早くからカエルのもとへ行きました。そして、その間、白鳥はわたりの準備をしました。白鳥が、北へわたるのは五日後でした。白鳥は、最後までウミネコには言わないことにしました。

そのころ、カエルとウミネコは、歌詞作りをしていました。

「この調子だと、四日後にできそうだ。」

カエルは言いました。

「そうだね。じゃあ六日後くらいに発表会かなあ。」

ウミネコは、カエルにそう言うのと、

「また明日。」

と言って帰りました。

ウミネコは帰ると、歌の話を、大船渡のカモメ、ウミネコ達、そして白鳥達につたえました。皆は、喜ん

だりさわいだりました。ウミネコは、そんな皆を見て喜びました。しかし白鳥は、ますます、言いだせなくなりました。白鳥は、困ってしまいました。そして、悩んだすえ、ある決意をしました。

次の日、ウミネコが起きると、白鳥達の姿はありませんでした。白鳥は、おき手紙もなく黙って行ってしまいました。しかし、ウミネコは泣かず、今日も、カエルのもとへ行きました。ウミネコも、わたりの事をかくごしていたからです。

「きつと、僕のために、なにも言わないで行ったんだ。」

ウミネコは、自分にそう言い聞かせ、カエルと共に、歌作りを続けました。でも、白鳥のことが、頭からはなれませんでした。

そして、四日がたち、ついに歌が完成しました。ウミネコは、大船渡のカモメ、ウミネコ達に歌を教えて、練習をするように頼みました。そして、合唱会の事をさまざまな鳥達に伝えて、来るように誘いました。

合唱会前日、大船渡のカモメやウミネコ達は、会場のかざり付けをしました。会場は山の上の広場です。そこからは、海が見えました。ウミネコは心の中で、明日の歌が、海をこえて、白鳥達にとどくといいなと思っていました。

本番当日、多くの鳥達があつまりました。スズメに

ハト、カモなどの鳥がきました。ウミネコは、大船渡のカモメやウミネコ達、そしてカエルに、

「がんばろう！」

と声をかけ、カエルを背中に乗せて、切り株のステージに立ちました。カエルは、ウミネコの背中から降りて、ケロッとなきました。すると、他のカエルもでてきて、ステージに並びました。一羽のカモメが、枝をとり、指揮をしました。歌が始まり、皆が楽しそうに歌います。ウミネコは、白鳥の事を考えながら歌っていました。

すると、上からなにかが降ってきました。雨かなと思いましたが、違います。木の実です。小さな木の実がパラパラと降ってきました。ウミネコが上を向くと、空に、袋を持った白鳥の群れがありました。

「白鳥君！」

ウミネコは、思わず声をあげました。白鳥は、北の国から、木の実やパンなど、おいしい食べ物を持ってきてくれました。

「さあ、歌を続けてよ。」

白鳥はそう言うのと、にっこり笑ってみせました。ウミネコ達の歌が、全部終わると、白鳥の持ってきた食べ物を皆で食べました。ウミネコは、皆が元気になってよかったなと思いました。そして、夜まで、白鳥とお

しゃべりをしていました。

ウミネコはいつの間にか寝ていました。ウミネコは起きると白鳥の手紙を見つけました。手紙には、

「ありがとう。また会う日まで。」

と、大きく書かれていました。ウミネコは、急いで海にむかうと、大きな声で、

「また会おうね。白鳥君！」

とさけびました。

ザザアザザアとゆれる波の音の向こうから、

「わかった。」

という白鳥の声が聞こえた気がしました。

忘れない

大船渡第一中学校一年 互野 紗矢香

幸せな日々は、毎日私のところにやってくるのだと思っていた。けどたった一日で、大切な人と、幸せな日々が、失われるなんて思ってもいなかった。

私は、チカ。私は犬だ。もう一匹いる。名前は、メイ。飼い主は、佐知子っていうんだ。私たちに名前をつけてくれたのは、佐知子なんだ。私は、チカラいっぱい生きてほしいからチカ、メイは、めいいっぱい生

きてほしいからメイと名付けられた。

佐知子は私たちに、

「今日は、すごく変な天気ね。」

といっていた。今日は、三月十一日だった。

佐知子の言ったことが現実となってしまう。大きな地震と大きな津波。同時にこんなことが起きてしまった。後に、東日本大震災と名付けられた。

私は佐知子たちに会えなかった。あの日から、すでに、二週間が過ぎた頃だった。私が一人で歩いていると、昔、隣だったおじさんが私にこう言った。

「チカは可哀想だな。佐知子さんも、メイも天国に行ってしまうて。」

私はおじさんの言っていることがわからなかった。わからなかったのではない。わかりたくなかったんだ。私だけ生きているということ。

私は、おじさんの家で暮らすことになった。

一カ月が過ぎた時だった。私は変な夢を見た。

「チカ。一回しか言わないからよく聞いて。佐知子と僕は、チカに会いに行くから。どうやって会えるかわからないけど、二日間チャンスをもらったから。」

「まって。なんで二日だけなの。メイ。」

変な夢だった。
そして、翌年、二匹の子犬が生まれた。私は、名前

を考えていると、

「去年の話覚えてる？僕たちだよ。チカ。」

すると佐知子が、

「あの日はごめんなさい。メイが車にひかれたの。だからチカを……。」

私は、一瞬わからなかった。なんでだろう。しかし、去年のことを思い出した。

「二日間だけ。」

チカは聞いた。

「二日ってことは、メイと、佐知子はどうなるの。」

だまりこんでしまった。

「忘れてしまうの。私たち以外は。だからがまんしてね。メイも私も忘れないから。」

チカは笑顔で、

「二日間、楽しもうね。」

二人はうなづいた。

走ったり、話したり、二日間というのは、とても短かった。別れぎわに佐知子は、

「今までありがとう。」

チカは笑顔で送った。

その日のことは、三人しかわかりません。

私は空を見上げて、

「私はここにいますよ。」

とさけんだ。すると、

「私たちは空でみているよ。」

とかすかに聞こえた。

私は、絶対に忘れたくありません。一歩ずつ未来に近づければいいと思っています。

必ず死んだ人は、空から見ていると思う。

だから悲しくない。絶対に空にいる。

だから私は悲しくない。

大船渡は観光の名所！

大船渡第一中学校一年 佐々木 勇太

僕が住んでいる場所は、大船渡だ。

二〇〇六年、大船渡には商業的施設がたくさん建ち、全国チェーンの大型スーパーや水族館、大型競技場に大型市民運動施設など、子供から高齢者まで楽しめる施設がたくさん建っていた。

特に大型スーパーや、お店に人が毎日のように人が行き来していて、食品を買う人が大勢いた。

そのお店は月曜と金曜に食品全品半額セールをやっていて、その日は八百台入る駐車場が、ほとんどない状態だった。

食品でいちばん人気なのが、魚介類、野菜で、サンマやカツオ、貝類はカキ、ホヤなどを買って行く人がたくさんいた。

水族館は、入館料が大人でも八百円と安く、その割には展示している魚たちが珍しいものだったり、大型の水そうに入っている魚が巨大だったり、レストランがあつたりと、すごく楽しめる所なので、ここも入館者がたくさんの人でいつもいっぱいだった。

この結果、売り上げが全ての商業施設をまとめると、一カ月で約八千万円と、ものすごく高い金額になった。

当然、たくさん商業施設があるからあちこちから車が次々来る。それで、東北道―宮古―大船渡―松島―東北道と、高速道路(制限速度九十キロ)が作られることになった。三年後の二〇〇九年、この道路は出来た。

無料区間なので車はたくさん通り、大型連休などには当然、渋滞が起きた。ただ、それ以上に来たい気持ちがあるのか、高速を通らないで遠くから来る人も大勢いた。高速が出来たからよりスムーズに来れるし、どうしても来たいという気持ちで、勢いはおとろえなかった。

競技場は、野球などのスポーツ観戦で、十万人入るが、七万人くらいしか来ない時もあった。時には、十万人以上ギュウギュウづめで、スキマがないくらいき

た時もあった。

また、近くに海があるため、コンテナクレーン四機ぐらいと、大型フォークリフト、それに大型リーチスターカーなど、コンテナ関係車両が数台いた。時には、めったに見ない超大型コンテナ船や、ばら積み船が一月に数回入って来た。

水産加工工場には、次々に加工する物が入ってくるから、社員はすごく忙しい。

ずっと、人が来ていて、毎日色々な所が満席で、こういう日々がずっと続くと思っていた。

が、ある日、事は起きた。

午前十一時十七分、マグニチュード八・八、最大震度大船渡、陸前高田、釜石、山田で六強という大規模大地震が発生した。停電でスーパールのエレベーターが動いている途中で停まったり、水族館では魚へ空気を送ることが出来なくなったりした。

地震だけではない。数分後、大津波警報が発令された。スーパやあらゆる施設にはまだ大勢の人がいる。この人数を一気に避難させるのにも絶対時間がかかる。でも、奇跡は起きた。実は大型の施設のほとんどには、非常用発電機があり、エレベーターも動かさず、中にいた人たちは全員助かり、館内（店内）放送で、避難を呼びかけることが出来た。全員あわてないで、スムーズ

ズに避難することが出来た。実は避難している頃に、すでに向こう岸に津波が来ていた。最後の人が逃げ始めて、十メートルくらい逃げた時に津波が来たので、もうギリギリの状態だった。

それからこの事だった。三十分もたたない内に、ガレキや色々な物を飲み込み、周囲の小さい建物（家など）をほとんど飲み込んだしまった。

数カ月後、スーパの近くに行ってみると、一階はエレベーターとエスカレーターを除いて全てなくなっていた。三階ぐらいの所にあとがあったので、そこまで来たのだなと思った。

誰かがつぶやいた。

「これではもう駄目だ：ほとんどの施設がなくなった。それでも元通りになるのだろうか：。」

その人は、悲しそうだった。

僕は言った。

「でも、僕たちは一人じゃありません。実際ここにたくさん人がいるじゃないですか。他の人たちと共に復興の道を歩んでいきましょう！」

復興：それは元に戻ることに。実際にそうなければいいと僕は心の中で願った。

三十年後、場所は変わったが、少し小さくした規模で様々な施設がまた建った。

大船渡の未来

日頃市中学校一年 新沼 愛理沙

ピカピカピカピカッ

「うわぁー。まぶしい。」

「なんだ。ここはどこ。」

私たちは、夢の中の世界に来てしまったようだ。

そこは、とてもきれいなところで、桜の木が並んで立っていて、近くには、きれいな花がたくさん咲いている。

私は、あたりを見わたして見た。そしたら、赤と白のえんとつが見えた。モクモクと、けむりを出している。

「あっ！太平洋セメントだ！」

「ここは、もしかして、大船渡の未来？」

私たちは、大船渡の未来へ、夢で来たようだ。

「ねえねえ、大船渡を探検しない？」

「いいね！行こう。」

「うわぁて。すごい！こんなところに、たくさんきれいな花が咲いている。」

そこには、色とりどりのきれいな花がたくさん咲い

ていました。すると、よく見ると花は、道が作ってあるように、左右に花が咲いていた。その花道をたどって歩いていくと、未来の私たちがいた。私は思わず、未来の自分に話かけてしまった。

「仕事は何してるの？いままでの私の夢は、ネイルアーティストなんだ。」

「私は、ネイルアーティストの仕事をしているよ。」

私は、未来の自分と別れて、探検に出発した。日頃市に行くと、車が渋滞していた。その先に行ってみると、五葉温泉が二倍大きくなっていて。そして、車もとめられなかった。五葉山に行ってみるとゴミは減って、きれいになっていて。花も、ヤマツツジのほかにも、たくさんきれいな花が咲いていた。

登っていくと人がたくさん登っていた。

「あー。疲れた。」

「じゃあ、温泉に行こう。」

日頃市は、自然がいっぱいだから、その分花もたくさん咲いていて、キラキラかがやいている。

「やっと、温泉に着いた。」

温泉に入ってみると、たくさん種類の湯があった。

「さっぱりしたところで、ホテルに行こう。」

私たちは、どんどん歩いて行っった。ホテルに着くと、

疲れていたせいか、すぐに寝てしまった。夢を見ると、現実の大船渡を見ていた。赤と白の煙突は、復興のため、がれきを、燃やすために、けむりがモクモクと出ている。そんな夢を見ていると、また

ピカピカピカピカッ

「うわぁー。まぶしい。」

私たちは、ベットの上で寝ていた。ふと起きたが、また寝てしまった。

すると、夢でみた、未来の人たちが夢に出てきて、

「また来てね！」

「待ってるよ。」

と言ってくれた。

少ししか話をしていないのに、いきなりまたまぶしくなった。

なにかと思ったら、お母さんがこわい顔で私を起こしてきた。

「何で起こしたの。」

と言うと、

「何言ってるの！二度ねをするんだったら、起きなさい。一日中ねてたんだからね。」

と言われた。

未来に行ってた時は、現実の時間と同じように過ぎていたようだった。そのことに気付いて、私は、時計

を見た。そしたら、たしかに、きのう寝たのは、午前六時ごろだった。時計を見ると午前八時だった。カレンダーを見ると、きのうは、三十一日だったのに、一日に変わっていた。月も変わっていた。しかも、私たちは、一回起きたのにもかかわらず、また寝てしまった。未来の大船渡に行ったようだ。私たちは、起きてすぐに、おこられてしまった。しかし、すぐに、お母さんに夢で見た大船渡の話をした。話おわると、お母さんが、

「未来の大船渡をつくっていくのは、あなたたちなんだから、しっかり勉強して、がんばっていくんだよ！」

と言われた。私たちは、その話を聞いてすぐに、勉強にかかった。寝ていた分の宿題もあったので、がんばって勉強をした。すると、どこからか、

「未来の大船渡のために、学校の勉強などもちゃんとやって夢のネイルアーティストになって、大船渡に少しでも手だすけできるようにがんばってね。」

と未来の自分に言われた。

「未来の人たちに言われたことができるようにがんばるぞー。」

「オー！」

ふるさと

末崎中学校三年 村上 鈴菜

今から書く内容は当時小学校六年生が書いたあの日の恐ろしさを経験した一人の女の子の物語です。

三月十一日金曜日午後三時くらいに今までに経験したことのない大きな地震がありました。そして私は、何がなんだか分からなくなり、頭が真っ白になり、泣きながら校庭に行きました。そして、地震は、二分くらい長く続き校庭には大きなじわれ。そして、体育館のガラスを見ると、ガラスがわれていました。

私は、まず、家族のことを一番最初に思いました。そして、おばあちゃんや急いで地震の中、弟と私を迎えに来てくれました。すると、隣にいた男の子のお父さんが「津波が来た」と叫んでいて、海のほうを見た、ものすごいスピードと威力で津波が来るのを見て、私は、「うそだ、これは絶対夢だ」と思いました。最初に押し寄せて来たのは、だんちの方で、私は、この光景は初めてでした。

だから私は、十五分くらいずっと足の震えが止まりませんでした。そして津波が何度も何度も来て家や電信柱や車や物が流されていって、私は「何も悪い事をしていないのになんで罪もない人が流され、物を壊す

のか」とすぐ疑問に思っていました。そして、その津波は、また何回も何回も来て、しばらくすると、波がおさまった。すると、おばあちゃんが「家まで行こうか」と言ってちよつと不安だったけど、おばあちゃんの車を学校に置き、三人で歩いて門之浜の裏を通って見てみると、あんなにきれいで落ちつくところや小さい時に遊んだところがあの波で家があつた場所もなくて、泥と海水だけで、家がぐちゃぐちゃで人もいない物がちらかっていて、わかめもくつついていたり、大きな船も波で押されて地面に横になっていました。あと、木が倒れていたり、電線が切れていたり、服が散らかって、車がひっくり返っていて、まるで私は、トミカの世界にいるかのように思いました。

私は、それらを見て言葉を失い、孤独感を感じました。そして、家に少し近づく時「家は、ぐちゃぐちゃになっていないか、もうすべてが終わりだ」と思いました。そして押し寄せて来た波のほうを見ると波は何事もなかったように、ふつうに歩いて私は、「あの波で、家や人が流されたりしていて、あの波は、すごくずるいし、にくい」と思いました。前のチリ地震津波より何十倍も、大きな地震や被害だと思いました。そういうことを考えながら歩いているとだんだん辺りが暗くなっていき不安になっていました。

突然歩いていけると、軽トラックのどこかのやさしいおじさんが「歩くの疲れるから乗ってけ」と言われて、三人で乗って近くまで乗せていってもらいました。私たちは、助かりました。ありがとうございました。と言いました。たぶんその軽トラックのおじいさんに乗せられてもらっていなかったら絶対夜になり途中で道が分からなくなり、津波が来て流されていたかもしれないかったです。あのおじさんに本当に感謝しています。そして少し歩って恐る恐る家の方を見たら何も変わっていないくてすごく安心しました。でも、家の下のほうを見てみると、すごくギリギリの所まで波の跡が残っていました。すごく危なかったです。

家に入り、電気は停電していてつかなかったので、ろうそくで照らして残っていたごはんを食べて早く寝ました。そして四時くらいに目がさめて見ると、廊下の所にお父さんがいたのですごくびっくりしました。「無事で良かった」と思いました。

でもあと二人の安否が分からず、不安でした。でも、お父さんが「お母さんとおじいちゃんとは病院に避難している」と言ったのですごくホッとしました。その事を聞いて、その日はぐっすり寝れて、次の日の夜には、じいちゃんが帰って来て、後はお母さんだけと思ってそして、次の朝、お父さんがいなくて、どこに行った

のかおばあちゃんに聞くと、お母さんを探しに行ったと言った時私は、「お父さんやさしい」と思いました。

でもその夜お父さんだけ来て、そして次の朝もお母さんを待ち続けていました。すると、二時くらいに、軽トラックに、お母さんとお父さんとお父さんの弟と弟のお嫁さんと来て、私はすぐお母さんに抱きついて泣きました。みんな無事で良かったと思っただし、見つけて来てくれたお父さんにもすごく感謝したいです。本当にうれしかったです。そして木曜日で、1週間たちました。そして、夜のラジオを聞いて、東北関東大震災で、亡くなった人たちは、岩手県で一万人をこえているのを聞いて、恐ろしいと思いました。次の日学校に行き、こなかった生徒もいたけど、友だちのAちゃんがいって言葉が「家流された」と言うことをAちゃんから聞いて、私みたいにくれしく思う人もいるけど、悲しい気持ちを持つ人もいるから私は、「元氣だして」と言ってAちゃんを励ましました。

私もあんな事でよくよしてはだめだと思いました。私も何か役に立つことをしたいと思いました。たとえばボランティア活動に積極的に参加したり、避難している人たちにメッセージを送ったり、この町をもっと明るくするために何かをしようと思います。あと、もうこうゆうことが二度と来てほしくない。津波

で犠牲になった人々は、すごく辛かったと思います。昨日の卒業式での一番印象に残っている事は、体育館に避難している人の気持ちです。その人たちは、わざわざ私たち卒業生のために朝ごはんを、あんパン半分だけしか食べないで、それに体育館をぞうきんで水ぶきをしてくれたりしました。避難している人には本当に感謝しています。そして、式が終わり教室に戻ると、机の上に一人一人かきめの子がいました。本当は、避難している人たちの食べるものだったのに、卒業祝いだからと言ってくれました。あと、雛壇を退けてまで、私たちのことを思っていてくれてありがとうございます。

あと、この地震のことは、私が子どもを産んだ時、子どもに話して聞かせたいと思います。もうあの津波が来てほしくないと思います。でも私たちは、津波の恐ろしさを知らなかったのです、この経験で津波が来たらどこに逃げればいいのか、また津波はいつくるか分からないので前もって逃げられる準備をしていきたいです。以上で私の物語は終わりです。

第 23 回

さんりく・おおふなとお話大賞審査委員

委員長 熊 谷 勵

委 員 下河原 シゲ子

委 員 今 野 義 雄

委 員 長 澤 敏 之

第 23 回

さんりく・おおふなとお話大賞入賞作品集

発 行 日 平成 25 年 12 月 18 日

編集・発行 大船渡市立中央公民館

〒022-0003

大船渡市盛町字内ノ目 4 番地 2

TEL 0192-26-3166

FAX 0192-26-5903

